

## 11. 会員・支部部門

### 11.1 概論

#### (1) 会員区分

土木学会を構成するのは会員であるが、その区分は 1983 年度に正会員、学生会員、特別会員の三種類となり、現在に至っている。

正会員は土木に関係している個人と法人を対象としているが、個人の正会員については称号としての名誉会員あるいはフェロー会員という制度がある。名誉会員の称号は土木工学または土木事業に関する功績が特に顕著で理事会が認めた方に贈られ、その名称等は途中で何回か変更されたが 1933 年度に設けられた制度である。また、フェロー会員の称号は土木分野において責任ある立場で活躍してきたと理事会が認めた方に贈られ、後掲の「11.2 フェロー会員制度」で詳述するように 1994 年度に創設された制度である。

学生会員は土木工学に関する学科を修めるための学校に在学中の方を、また特別会員は正会員以外で土木学会の目的、事業に賛同する個人あるいは団体を対象としている。

#### (2) 会員数

1994 年度以降の会員数の変遷を表-1 に示すが、これによると、会員全体では 1994 年度には 3 万 5 千程度であったが、徐々に増加して 2000 年度には 4 万を超えてピークとなった。しかし、それ以降は減少傾向であり 2003 年度には 3 万 9 千弱となったが、1994 年度と比べると 1.10 倍であった。

会員区分別では、正会員の個人会員や学生会員は概ね会員全体と同じような増減傾向を示すが、学生会員の伸びが大きく、2003 年度の学生会員数は 1994 年度に比べて 2 倍以上であった。また、正会員の法人会員は 1994 年度から減少傾向であり、2003 年度の会員数は 1994 年度の 0.86 倍であった。これとは反対に、特別会員は増加傾向にあり、2003 年度の会員数は 1994 年度の 1.30 倍であった。

表-1 土木学会会員数の推移（1994 年度～2003 年度）

単位：人（名）

| 会員区分    | 1994年度  | 1995年度  | 1996年度  | 1997年度  | 1998年度  | 1999年度  | 2000年度  | 2001年度  | 2002年度  | 2003年度  |
|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 正会員 個人  | 31,269  | 31,497  | 32,167  | 32,463  | 32,016  | 32,842  | 33,708  | 32,855  | 31,971  | 31,909  |
| ※名誉会員   | (173)   | (182)   | (175)   | (178)   | (180)   | (189)   | (211)   | (215)   | (218)   | (251)   |
| ※フェロー会員 | (1,357) | (1,691) | (1,832) | (1,842) | (2,000) | (2,001) | (1,976) | (2,023) | (2,170) | (2,209) |
| 正会員 法人  | 758     | 731     | 760     | 755     | 739     | 717     | 712     | 700     | 664     | 649     |
| 小 計     | 32,028  | 32,228  | 32,927  | 33,218  | 32,755  | 33,559  | 34,420  | 33,555  | 32,635  | 32,558  |
| 特別会員    | 540     | 576     | 575     | 570     | 557     | 563     | 661     | 745     | 720     | 701     |
| 学生会員    | 2,707   | 3,762   | 4,623   | 4,490   | 4,539   | 5,647   | 5,244   | 5,381   | 5,214   | 5,608   |
| 合 計     | 35,275  | 36,566  | 38,125  | 38,278  | 37,851  | 39,769  | 40,325  | 39,681  | 38,569  | 38,867  |

注：会員数は年度末時点の人数

※ 名誉会員数およびフェロー会員数は個人会員数の内数

#### (3) 会員の構成

2004 年 5 月末時点での正会員の個人会員の構成比を図-1 に、また法人会員（正会員と特別会員の合計）の構成比を図-2 に示す。個人の正会員については、建設会社、コンサルタント会社の会員数が多く、また、民間会社（建設、コンサルタント、製造、鉄道、電力・ガス、その他民間の合計）の会員数が全体の 70% を超えている。

また、法人会員については、個人会員と同様に、建設会社、コンサルタント会社の会員数が多く、民間会

社の会員数も全体の60%を超えている。ただし、法人会員では中央官庁の会員数が多いことが特徴として挙げられる。

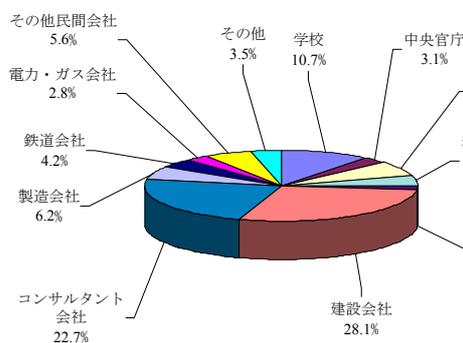


図-1 個人正会員構成比 (2004年5月末時点)

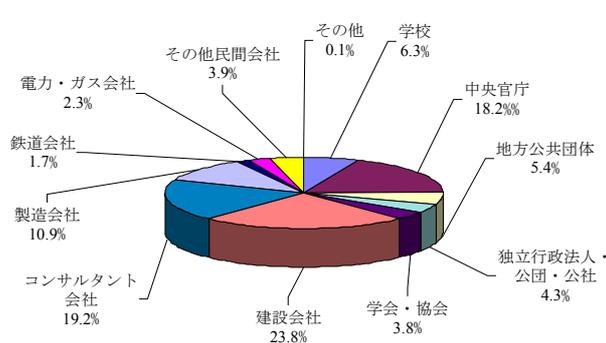


図-2 法人会員構成比 (2004年5月末時点)

学生会員については、図-3 からわかるように、大学院生が約60%程度を占めており、学生会員の中で大きなウエイトを占めている。

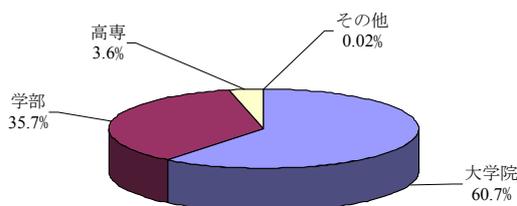


図-3 学生会員構成比 (2004年5月末時点)

また、表-2 の会員の性別構成比によれば、統計を取り始めた1998年1月末時点と最新のデータである2004年5月末時点と比較すると、正会員、学生会員共に、女性会員の割合が増加しており、特に、学生会員での増加が大きい。

表-2 会員の性別構成比

| 会員種別 | 1998年1月末 |        | 2004年5月末 |        |       |
|------|----------|--------|----------|--------|-------|
|      | 会員数 (人)  | 割合 (%) | 会員数 (人)  | 割合 (%) |       |
| 正会員  | 全体       | 33,473 | 100%     | 33,245 | 100%  |
|      | 男性会員     | 33,148 | 99.0%    | 32,752 | 98.5% |
|      | 女性会員     | 325    | 1.0%     | 493    | 1.5%  |
| 学生会員 | 全体       | 6,127  | 100%     | 5,476  | 100%  |
|      | 男性会員     | 5,800  | 94.7%    | 4,983  | 91.0% |
|      | 女性会員     | 327    | 5.3%     | 493    | 9.0%  |

#### (4) 会員サービス

近年、会員数は減少傾向にあるが、これは土木に携わる技術者、学者、学生等の人数そのものが減少していること、および退会者が毎年約5千人もあることが主要な原因と考えられる。

この減少傾向を断ち切って会員を増加させるためには、会員にとって魅力ある学会（換言すれば、魅力あるメリットを会員に提供できる学会）とすることが必要不可欠である。このような観点から、各部門や各支部でさまざまな活動を展開している。

会員・支部部門では、同じ職場内での会員相互および会員と本部・支部間の双方向の情報伝達を促進するために職場班の充実・強化に努めるとともに、2002年度から職場班ニュースをE-mailにより各班へ送付することを開始した。2004年5月末時点で職場班の班数は1,802班で、総班員数は28,827人であり、組織率は約74%である。

さらに、メールアドレスを登録している個人会員宛に、学会の行事等の情報を定期的にE-mailで送付するサービスも2003年度から開始した。2004年5月末時点でのメールアドレスを登録している個人会員数を表-3に示すが、半分弱の会員が登録している。

表-3 メールアドレス登録済み会員

| 会員種別 | 会員     | メールアドレス登録済み会員 |        |
|------|--------|---------------|--------|
|      |        | 会員数(人)        | 割合 (%) |
| 正会員  | 33,245 | 13,847        | 41.7%  |
| 学生会員 | 5,476  | 3,550         | 64.8%  |
| 合計   | 38,721 | 17,397        | 44.9%  |

また、2005年度からは会員証を磁気カード化して継続教育のCPDの登録等に利用できるようにし、会員にとっての利便性を高める予定である。

## 11.2 フェロー会員制度

フェロー会員制度は、イギリスやアメリカの土木学会で、学会入会後の経歴に応じて、準会員、正会員、フェロー会員、名誉会員と変わっていくことを参考にして、1994年度に創設された制度である。

フェロー会員制度の目的は、学会の規程によると、「土木分野の見識に優れ、責任ある立場で長年にわたり指導的役割を果たし、社会に貢献してきた正会員に対し、その能力と業績を評価してフェロー会員として認定し、もって学会の一層の活性化と、会員の国際的活動の推進のため主導的役割を果たすことを目的とする」としている。

フェロー会員の申請資格は、①土木分野において責任ある立場でおおむね10年以上業務を遂行し、かつ、②学会員としての経歴が原則として20年以上（ただし、年齢に応じた緩和規定を設定）である。申請後、フェロー審査委員会での審査を経た後、理事会で認められた者がフェロー会員として認定される。

フェロー会員の人数については、その変遷が前掲の表-1に示されているが、これによるとフェロー会員は増加傾向であると言える。しかし、イギリスやアメリカの土木学会ではフェロー会員の割合は正会員の10%前後であるのに比べると、本学会では2003年度末時点で7%程度であり、まだまだ少ないのが現状である。

また前述したように、フェロー会員は学会の今後の一層の活性化と会員の国際的活動の推進において主導的役割を果たすことが期待されている。このような観点から、2002年度の全国大会から、フェロー会員から全世代の土木技術者への提案や問題提起を行ない、それにより世代を超えた議論を行なうために、講演者をフェロー会員に限定した特別セッションが設けられた。特別セッションでの発表論文数は、2002年度は38編であったが、2003年度には6編と大幅に減少した。特別セッションの積極的な広報活動やフェロー会員のさらなる自覚により、このような取組みを発展させていくことが望まれる。

[増田 光男・主査理事（友広 勲）]

## 11.3 北海道支部

### (1) 北海道支部の事務局の現状

北海道支部は、関西、東北について第3番目の支部として1937年10月に札幌市内に設置されて以来、支部事務局については引き受け機関が事務局を担当したため1965年までは、ほとんど毎年のように移動している。1966年2月から長銀ビル5階へ移転し固定、1999年5月に同ビル8階に移転している。2000年12月に長銀ビルが南一条 K ビルと改称したが同ビル8階に現在の支部事務局がある。事務局の郵便番号は「060-0061」で、住所は「北海道札幌市中央区南1条西2丁目」である。事務局員は現在2名であり、常勤である。土木学会北海道支部、地盤工学会北海道支部および北海道土木技術会の事務局の業務をも兼務している。

支部の事務局員は次のとおりである。

|           | 事務局長      |       | 職員    |
|-----------|-----------|-------|-------|
| 1987~1998 | 秋田 稔      | 1991~ | 林 美和子 |
| 1998~2002 | 長谷川勝一（故人） |       |       |
| 2002~     | 佐々木文雄     |       |       |

### (2) 北海道支部の10年間の事業

支部事業の主なものは以下のとおりである。

#### 1) 全国大会および年次学術講演会（2002年9月）

2002年度全国大会は、2002年9月25日（水）から27日（金）までの3日間、北海道大学をメイン会場として、札幌市において開催した。大会のメインテーマを「21世紀のクリオティ・オブ・ライフをめざして」とし、第57回年次学術講演会、研究討論会、特別講演会、全体討論会、交流会、学生交流会の各行事を企画実施した。本大会の特徴としては、自然が数多く残っている北海道における開催であることから、自然との調和を保ちながら進めていく今後の社会資本整備のあり方について、「自然環境共生インフラ」をキーワードとした全体討論会を開催したこと、過去の北海道大会に比べ、年次学術講演会の会場を多くし定員を増やすための対策を取ったこと、試行的に液晶プロジェクターによるセッションを設けたこと、講演者をフェロー会員に限定した特別セッションを実施したことなどがあげられる。

全国大会行事の概要は以下のとおりである。

第57回年次学術講演会は北海道大学内の工学部、高等教育機能開発センター、情報・エレクトロニクス系棟で開催された。講演総数は4326題、座長総数は557名、延べ参加者数23501名。

研究討論会は北海道大学で開催された。討論会題数は22題、参加者数は1605名。

特別講演会は札幌市民会館で開催された。講演数は2題、参加者数は1550名。

全体討論会は札幌市民会館で開催された。参加者数は1550名。

交流会はホテルニューオータニ札幌で開催された。参加者数544名。

学生交流会は北海道大学内レストラン「はるにれ」で開催された。参加者数111名。

その他

a) 市民向け行事は札幌駅西口コンコースで開催された。2002土木学会全国大会のGALLERY。

b) 見学会は、建造物とダム&峠視察コース（札幌市郊外、小樽市）および有珠山噴火視察コースを実施。なお、詳細は「土木学会誌 Vol.88 No.1（2003.1）」に掲載されている。

#### 2) 支部創立60周年記念事業（実行委員長：新山 惇（北海道開発局））

北海道支部は、関西、東北について第3番目の支部として1937年10月に札幌市内に設置されて以来、1997

年10月で創立60周年を迎えた。これを記念して1997年11月18日(金)の「土木の日」に、土木学会宮崎会長を迎えて「土木学会北海道支部創立60周年記念式典」を挙行政した。京王プラザホテル札幌を会場に記念式典、功労者表彰、記念講演会、記念祝賀会などの行事が盛大に行われた。表彰された功労者は10名である。記念講演は「岩盤の破壊現象とその予知」と題して石島 洋二(北海道大学)が行い、参加者は328名であった。記念祝賀会の参加者は145名である。また、記念事業の一環として、支部会員名簿が発刊された。1998年2月末現在の北海道支部会員として1980名が登録されている。発行部数は2050冊である。支部会員の登録・整理は、土木学会本部会員課で一括処理され、土木学会誌の送本先が北海道地区である土木学会員が支部会員として登録されている。今回の支部会員名簿は、この本部管理データを下に作成したものである。

### 3) 論文報告集の刊行

1973年度から論文報告集と改称し現在に至っている。各年度の論文報告集の号数、申し込み件数、発表年月、開催市、会場などを以下に記載する。なお、発表件数は欠番が何件かあるため、申し込み件数より若干少ない。なお、論文の内容の詳細は各年度の刊行論文報告集を参照されたい。

| 年度   | 号数   | 申し込み件数 | 発表年月   | 開催市  | 会場            |
|------|------|--------|--------|------|---------------|
| 1994 | 第51号 | 254件   | 1995.2 | 札幌市  | 市民会館          |
| 1995 | 第52号 | 295件   | 1996.2 | 函館市  | 函館国際ホテル       |
| 1996 | 第53号 | 283件   | 1997.2 | 札幌市  | 市民会館          |
| 1997 | 第54号 | 284件   | 1998.2 | 室蘭市  | 室蘭工業大学        |
| 1998 | 第55号 | 304件   | 1999.2 | 札幌市  | 市民会館          |
| 1999 | 第56号 | 283件   | 2000.2 | 北見市  | 北見工業大学        |
| 2000 | 第57号 | 304件   | 2001.2 | 札幌市  | JR北海道社員研修センター |
| 2001 | 第58号 | 287件   | 2002.1 | 札幌市  | 市民会館          |
| 2002 | 第59号 | 267件   | 2003.2 | 苫小牧市 | 市民会館          |
| 2003 | 第60号 | 251件   | 2004.2 | 札幌市  | 札幌コンベンションセンター |

### 4) 支部奨励賞

1960年度より毎年度授与している。各年度の受賞人数と受賞者氏名を以下に示す。

| 年度   | 受賞人数 | 受賞者氏名 |       |       |      |
|------|------|-------|-------|-------|------|
| 1994 | 3人   | 須藤賢哉  | 今 尚之  | 宮本修司  |      |
| 1995 | 3人   | 西 弘明  | 小幡卓司  | 吉田英樹  |      |
| 1996 | 3人   | 渡辺 力  | 川瀬良司  | 下條晃裕  |      |
| 1997 | 3人   | 畑 一洋  | 原 文宏  | 大久保孝樹 |      |
| 1998 | 3人   | 三好章仁  | 小室雅人  | 渡部靖憲  |      |
| 1999 | 3人   | 安達健夫  | 吉田 行  | 佐々木靖博 |      |
| 2000 | 3人   | 三田村 浩 | 早川哲也  | 岸 邦宏  |      |
| 2001 | 4人   | 鈴木総士  | 田澤 寿  | 遠藤裕丈  | 佐藤太裕 |
| 2002 | 2人   | 皆川正樹  | 下夕村光弘 |       |      |
| 2003 | 4人   | 平沢秀之  | 羽山早織  | 平澤匡介  | 日野 智 |

### 5) 支部技術賞

1977年度より毎年度授与している。各年度の受賞件数および受賞対象を以下に示す。

| 年度   |  |
|------|--|
| 1994 | 1) 苫東厚真発電所3号機取水設備の設計と施工<br>2) 国縫漁港<br>3) 跨高速道路橋のプレキャスト化  |
| 1995 | 1) PC床版2主桁橋の開発-----ホロナイ川橋の設計施工-----<br>2) 流水を海中から観測できる世界初の氷海展望塔と日本最大級の氷海の散歩道・親水防波堤の建設<br>3) 十勝大橋<br>4) 砂川遊水池   |
| 1996 | 1) 呼人漁港西防波堤<br>2) 知内発電所2号機燃料タンク基礎の設計と施工<br>3) 北海道縦貫自動車道来馬川橋<br>4) 水中ストラット式栈橋工法による苫小牧港入船国際コンテナふ頭の整備   |
| 1997 | 1) 白鳥大橋主ケーブル防食工-----S字ワイヤラッピング工法-----<br>2) 札内川ダム-----高炉スラグ微粉末を混和剤に用いたコンクリートダム-----<br>3) 新牛朱別川橋梁  |
| 1998 | 1) 十勝川音更地区引堤事業施工計画<br>2) 白尻漁港北護岸(カモメドーム)<br>3) 石炭灰混合改良土による海上築堤工法の開発と施工<br>4) 大断面TBMを採用した滝里発電所導水路トンネルの設計と施工   |
| 1999 | 1) 新琴似高架新川架道橋<br>2) 土狩大橋<br>3) プレキャストフォームケーソンの開発と施工<br>4) プレキャストコンクリートブロック型枠工法(積木型枠ブロック工法の開発と施工)   |
| 2000 | 1) 苫小牧厚真発電所4号機貯炭サイロ-----スリップフォーム工法による貯炭サイロの施工-----<br>2) 長万部橋<br>3) 青苗漁港 漁港施設用地(人工地盤)<br>4) 3・1・52都市計画道路ポプラ通<br>5) 無人化施工による有珠山の泥石流対策(板谷川災害関連緊急砂防工事及び西山川災害復旧工事) |
| 2001 | 1) 苫小牧厚真発電所4号機復水器冷却用取水施設の設計・施工<br>2) 都市計画道路3・2・10環状通の設計・施工 「環状通エルムトンネル」<br>3) 高性能軽量骨材コンクリートPC箱桁橋の設計・施工<br>4) 道央自動車道 有珠山噴火災害復旧事業                                |
| 2002 | 1) 稚内港北防波堤ドーム耐震補強工事<br>2) 新千歳空港滑走路改良工事における大粒径中温化アスコンを使用 シックリフト工法の施工  |
| 2003 | 1) 泊発電所3号機増設工事のうち埋立護岸工事の設計と施工<br>2) 一般国道334号浦士別道路における環境に配慮した函渠工の設計と施工<br>3) 北海道縦貫自動車道 鷲の木工事における4連インターロッキング式配筋橋脚の設計・施工  |

6) 支部功労賞

1997年度に制定された土木学会北海道支部功労賞規定により、下記の方が受賞されている。

| 年 度  | 受賞者数 | 受 賞 者 氏 名 |       |       |       |       |  |
|------|------|-----------|-------|-------|-------|-------|--|
| 1997 | 10名  | 横道 英雄     | 中村作太郎 | 栗林 隆  | 町田 利武 | 岡田 光夫 |  |
|      |      | 尾崎 晃      | 北郷 繁  | 鷹田 吉憲 | 山岡 勲  | 能町 純雄 |  |
| 1998 | 3名   | 市瀬 勲      | 倉橋 力雄 | 本間 四郎 |       |       |  |
| 1999 | 3名   | 岸 力       | 林 正道  | 山田 照一 |       |       |  |
| 2000 | 3名   | 石橋 嘉明     | 小野 中  | 河野 文弘 |       |       |  |
| 2001 | 3名   | 佐藤 幸男     | 菅原 照雄 | 岡本 成之 |       |       |  |
| 2002 | 3名   | 小西 郁夫     | 角田 和夫 | 渡辺 昇  |       |       |  |
| 2003 | 3名   | 舘谷 清      | 藤田 嘉夫 | 加来 照俊 |       |       |  |

#### 7) 年次技術研究発表会

支部刊行の論文報告集に掲載された論文および報文を通常毎年2月上旬に発表会において発表している。1981年室蘭市開催より隔年（室蘭市・北見市・苫小牧市・函館市）で地方開催している。前述した論文報告集の刊行の項目で記載した通りである。なお、2001年度（2002年1月）の開催市は苫小牧市の予定であったが、札幌市で第11回国際冬期道路会議が開催された関係で、会員の利益を考え、苫小牧市の開催を一年延ばし、札幌市で開催することになった。

#### 8) その他（講習会、講演会および講演と映画の集いなど）

講習会は2~3回、講演会1~2回、講演と映画の集い1回程度、年度によって回数は異なるが、原則的に実施している。

#### 9) 土木の日の行事

「土木の日」の関連事業として、一般市民対象（親子）現場見学会、小・中・高校教諭対象現場見学会、地盤工学会共催見学会、選奨土木遺産認定書授賞式、記念シンポジウム、講演会、映画会、パネルディスカッション、地方事業（北見地区、苫小牧地区、室蘭地区、函館地区）などを年度によって異なるが、原則的に実施している。

#### 10) 2003年十勝沖地震被害調査団の報告会

2003年9月26日午前4時50分頃、北海道十勝沖を震源とする気象庁マグニチュードM8.0の地震が発生し、北海道十勝、釧路、胆振・日高地方を中心に河川、港湾、水道、および道路・橋梁などの被害が発生し、また長時間にわたる津波が観測された。土木学会地震工学委員会（委員長：後藤 洋（防災科学技術研究所））ではただちに被害調査団派遣に関する検討に入り、土木学会災害緊急対応部門と協議のうえ、十勝沖地震被害に関する調査団派遣を決定した。土木学会および地盤工学会との合同調査団のメンバーは、現地の方を中心に選出してほしいとの要請を受け、土木学会地震工学委員会地震被害調査小委員会の宮島昌克（金沢大学）の協力により決定した。調査は主に10月4日から5日まで実施した。この地震ではこれまでの北海道東部で発生した釧路沖、東方沖地震などと比較して、北海道のほぼ全域にわたって大きな震度分布となったこと、十勝川を遡上する津波の映像が長時間にわたって観測されたこと、および出光石油苫小牧精油所のタンク2次災害の発生などを大きな特徴としている。これらに関し、土木学会2003年十勝沖地震被害調査報告会を北海道支部主催として下記の要領で開催した。

日 時： 2003年11月25日（火） 13:00~17:00

場 所： ホテルモントレ札幌 1F ケンジントールーム（札幌市中央区北4条東1丁目）

話題提供者 （40分程度、質問10分程度含む）

- ・地震動関係 片岡 俊一 (弘前大学)
- ・地盤関係 三浦 清一 (北海道大学)
- ・津波関係 谷岡勇市郎 (北海道大学)
- ・橋梁関係 大島 俊之 (北見工業大学)
- ・ライフライン関係 宮島 昌克 (金沢大学)

参加者数： 277 名

(3) 支部歴代支部長・副支部長・幹事長名簿

1997年度から二名の副支部長を置くことになった。歴代支部長・副支部長・幹事長の氏名は下記のとおりである。なお、( )内の氏名は前任者である。

| 年度   | 支部長                             | 副支部長                                 | 幹事長                             |
|------|---------------------------------|--------------------------------------|---------------------------------|
| 1994 | 小林 豊明 (北海道開発局)<br>(柳川 捷夫) ( " ) |                                      | 星 清 (開土研)<br>(森 康夫) ( " )       |
| 1995 | 板倉 忠興 (北海道大学)                   |                                      | 三田地 利之 (北海道大学)                  |
| 1996 | 谷藤 和三 (北海道電力)                   |                                      | 高橋 耕平 (北海道電力)                   |
| 1997 | 新山 惇 (北海道開発局)                   | 近藤 俣郎 (室蘭工大)<br>九里 忠正 (北海道開発コンサルタント) | 中村 興一 (北海道開発局)                  |
| 1998 | 近藤 俣郎 (室蘭工大)                    | 坂本 眞一 (JR 北海道)<br>許士 達広 (開発土研)       | 斉藤 和夫 (室蘭工大)                    |
| 1999 | 坂本 眞一 (JR 北海道)                  | 瓜田 一郎 (札幌市)<br>斉藤 和夫 (室蘭工大)          | 一條 昌幸 (JR 北海道)                  |
| 2000 | 瓜田 一郎 (札幌市)                     | 天谷 直純 (北海道庁)<br>斉藤 和夫 (室蘭工大)         | 中野 淑文 (札幌市)                     |
| 2001 | 逢坂 禎 (北海道庁)                     | 平野 道夫 (北海道開発局)<br>(熊谷 勝広) ( " )      | 佐藤 馨一 (北海道大学)<br>村上 清志 (北海道庁)   |
| 2002 | 平野 道夫 (北海道開発局)                  | 佐藤 浩一 (北海道大学)<br>金澤 義輝 (ドーコン)        | 川村 和幸 (北海道開発局)<br>(鈴木 英一) ( " ) |
| 2003 | 佐藤 浩一 (北海道大学)                   | 進藤 義郎 (ドーコン)<br>中野 淑文 (札幌市)          | 林川 俊郎 (北海道大学)                   |

[佐藤 浩一]

## 11.4 東北支部

東北支部は1927年設立の関西支部に次いで1937年6月に設立され、今年で67周年を迎える。この間、旧制仙台高等工業学校、旧建設省東北地方建設局の一部を借用して事務局を置いてきたが、1969年4月から仙台市二日町の九七ビルに独立事務所を設け、更に1973年11月より現在の同町二日町ビルに移転して現在に至っている。支部創立以降、支部会員相互の交流・技術研鑽を図るとともに、宮城県沖地震・日本海中部地震等の災害調査及び報告書作成や青葉城天守台石垣修復計画樹立等の調査委員会活動を行い、また土木事業について一般市民に対するPR等の諸活動を活発に実施している。

ここでは、土木学会創立80周年（1994年）記念誌以降の10年間における支部活動の概要を述べる。

### (1) 支部設立60周年記念事業

1997年11月には、東北支部設立60周年を迎え、記念誌の発行と記念式典を行った。記念誌は、20周年、40周年と、それまでの東北地方における20年分の土木事業の記録をまとめて来たことを踏襲して、1977年～1997年の20年間について「東北の土木」の記録をとりまとめて刊行した。この20年間には1973年のオイルショック、その後の安定成長期を含み、東北においても1982年の東北新幹線開通（上野・盛岡間）、1986年の東北縦貫自動車道全線開通、さらに1988年には青函トンネル完成等のビックプロジェクトの完成等が相次ぎ、東北における社会資本整備への貢献と高度な土木技術の発展の足跡を収録している。また、記念式典は設立60周年の節目を迎えるに当たり過去60年間の学会活動を振り返ると共に今後の事業展開の尚一層の努力を誓い合うものとして、内容的には簡素に心がけ、支部活動における功労者の表彰と記念講演に主体を置いたものとした。

### (2) 全国大会

2000年という20世紀最後の記念すべき年の全国大会は、9月21日（木）から23日（土）までの3日間、メインテーマを「地域・人・技術」とし、サブテーマに「時代を創り地域をはぐくむ土木技術」と設定し、東北大学川内北キャンパスをメイン会場として仙台市において開催した。

この大会からは、コスト縮減、運営の効率化を図る事を目的に、講演申込受付の電子化、概要集のCD-ROM化、参加費用の見直し等、抜本的な運営方法の改善が行われた。この方針を踏まえて実行委員会では、大会運営の基本方針を 学術主体、簡素化、経費節減において、行事内容は討論会と学術講演会をメインとして見学会やパネル展示会を取りやめ、且つ、役員や会場係を従来の約半数に押さえて人件費の削減等を実施した。

実施した第55回年次学術講演会には総数3,887題の発表があり、延べ約18,700人の方が参加し、研究討論会は21テーマ2,300人を超える参加者により熱心な討論が行われた。

大会2日目午後には、会場を仙台国際センターに移して特別講演会および特別討論会を開催した。特別講演会では、土木学会鈴木道雄会長から「社会資本整備の課題と土木学会の役割」を、早稲田大学樋口陽一教授から「『公共』と『市民』～『都市』について考える」のテーマでご講演を戴いた。特別討論会は、全国大会の行事としては初めての試みで、企画委員会の協力のもと、本大会の目玉行事として企画実施した。内容的には、開催年が2000年という特別な年であることを考慮して、社会に対して「土木」を広くPRし、理解してもらう絶好の機会ととらえ、一般市民にも広く参加を呼びかけて「社会資本と土木技術に関する2000年仙台宣言（案）」と題して実施した。

「社会資本と土木技術に関する2000年仙台宣言（案）」については、特別討論会において話題提供者からのご意見に加えて、会場参会者から出されたご意見等により活発なる討議がなされ、その基本的な立場について了承された。その後、アンケートやインターネットによる意見を企画委員会に於いて集約し、内容検討を経て、11月22日開催の理事会に於いて承認されている。（詳細は土木学会誌2001年1月号参照）

### (3) 各種委員会

#### 1) 野蒜築港 120 年委員会

東北地方の殖産振興政策を目的として、明治初頭に大久保利通により計画され、明治 11 年（1878 年）に着工された野蒜築港事業から 120 年の経過を機に、野蒜築港事業の歴史を解き明かし、この貴重な近代土木技術を後世に正確に残すと共に、土木技術の進展や、地域・自然と調和した土木の役割を多くの人々に正しく理解してもらうことを目的として、「土木の日」関連事業の一環として、地元の郷土史研究者や学識経験者等の幅広い人々の協力を得て委員会組織を設立した。野蒜築港事業は第一期完成後 2 年にして襲来した大型台風により破壊され、事業が中断したため「幻の港」とも言われ、文献等がほとんど残されていないため、委員会では明治期の新聞収集や地元長老の話を聴取する等の地道な活動をし、その調査結果について毎年一般公開のシンポジウムやワークショップを開催して報告し、参加者との意見交換を行っている。このような委員会活動が地元の人々にも大きな影響を与え、地元浜市小学校 6 年生の総合的学習テーマとして取り上げられて、研究結果がシンポジウムで発表され、また「野蒜築港ファンクラブ」という市民グループの結成等に発展し、遺構の保存活用等の地域活動にまで広がりを見せている。ファンクラブでは、2002 年 8 月に明治初頭の三大築港として事業化された三国港、三角港の地元小学校の子供達を現地に招待しての交流会を開いており、委員会もこれを受けて、2003 年 2 月には土木学会の関西支部および西部支部の協力の下に、NTT の携帯電話回線を利用しての三大築港の三元テレビ中継とオランダに留学中の知野委員とのインターネットを組み合わせた四元中継による「明治三大築港交流会」を開催して、各地域間の情報交換会を実施している。2004 年 3 月には港背後地の都市計画の一部として下水道遺構が発見され、神戸や横浜等の外国人居住区を除けば国内最古級の近代的な下水道跡として注目されており、今後は詳細なる調査を進める予定である。

#### 2) 土木遺産選考委員会

社会資本としての土木施設は、日常生活にあまりにも密着しているが故に評価が薄く、江戸時代以前に築造されたもので現存しているものは文化財として認識されているものも多いが、明治期以降における建造物は、歴史的価値からも正当に評価されているとは限らない。このことから、これらの保存活用と土木技術力発展過程の証としての遺産的価値を広く社会にアピールする必要性から、2000 年に土木学会に「土木学会選奨土木遺産」認証制度が創設されたことを受け、当支部では次年度の 2001 年 5 月に「東北支部選奨土木遺産選考委員会」を設立し、東北地方における土木遺産の調査研究、支部推薦候補の選定、認証された遺産の地元への伝達式と遺産制度の意義説明並びに地元における土木遺産を活用するための諸活動の支援等を行っている。

また、2004 年 3 月には、当支部関係の既認証 6 件についての紹介パンフレットを作成し、関係機関等に配布している。

#### 3) 次世代教育検討会

「土木の日」関連事業として開催された前記、「野蒜築港 120 年委員会フォーラム」に工業高校の先生が参加され、「土木科の生徒に“土木を学ぶ”動機付けに調査研究に参加させたい」という思いを抱かれたのが発端となり、実現したのがこの事業で、一工業高校のみならず、既に土木の道を進もうとしている若者（高校や大学で土木を学んでいる学生：若手技術者育成）と、これから自分の進路を決めようとしている若年者（小、中、普通高校生徒：若年者啓蒙）の 2 タイプに分類して事業を進めることとして 2001 年に「次世代教育検討会」を設けた。事業としては委員会設立前年の 2000 年にケーススタディとして、前記工業高校の 2 年生（保護者も含む）に対して、支部会員で産・学・官それぞれの立場で社会の第一線で活躍されている方々に講師をお願いして、年 8 回（各 2 時間）の講義を実施した。

検討会委員は事業の地域的広がりを図るために各県代表と講師派遣母体となる産・学・官の代表により構成した。2004 年度以降は若年者に対する土木の啓蒙活動にも力を注ぎ、支部を通して各関係機関が積極的に小中学生の総合的な学習の時間に土木に関するプログラムを提供できるよう、その方策について話し合い、

実践していく予定である。

#### 4) 東北の土木技術を語る会

「社会資本と土木技術に関する 2000 年仙台宣言」の趣旨を理解し、さらに深める活動推進を目的に、支部の若手の技術者を対象として、時の話題について識者を招いて講演して戴き、その話題を中心に自由なる意見を語りあう会で、この計画運営のための世話人会を 2001 年 1 月に設立し、世話人会メンバーの持ち回り担当でテーマを定める方式をとって、以後 2004 年 3 月までに 9 回を数える会を実施している。

#### (4) 「土木の日」と「くらしと土木の週間」行事

1994 年~1998 年にはこの期間にあわせたフォーラム等を企画実施してきたが、以降は特に 11 月 18 日の土木の日にとらわれずに、一般市民への広報関係行事を関連行事として位置づけ、毎年各種の行事を実施している。定期的行事としては、郡山地区において年毎にテーマを定めて、野外（見学会）と室内（シンポジウム）を組み合わせた企画を実施しており、仙台地区に於いては、東北工業大学での学園参加型イベントを、また、北部青森地区に於いては講演会を実施しており、さらに現場見学会を出来るだけ仙台地区に偏ることのないように配慮して、2~3 地区において実施している。

#### (5) 海外技術調査団の派遣

1988 年より海外各国の土木事業及び技術発展の実態把握と、資料収集による会員の視野向上目的とした「海外技術調査団」の募集・派遣を実施している。

1994 年は第 7 回目として「オーストラリア都市建設調査団」を 18 名で 11 日間、1995 年は「中国黄河・長江（三峡ダム）調査団」を 15 名で 10 日間、1996 年は「ヨーロッパ長大橋調査団」を 21 名で 11 日間、1997 年は「ヨーロッパ道路技術調査団」を 12 名で 11 日間、1998 年は「南ヨーロッパ都市景観計画調査団」を 15 名で 11 日間と 11 年間連続で実施して報告書を刊行している。

しかし、年々、参加希望者が少なくなり定員確保が困難になってきたことから、毎年の継続実施は避けることとした。2002 年には調査対象都市を減らす等の経費を極力抑えた計画に変更して、応募者 13 名により 8 日間の「21 世紀ヨーロッパ主要都市のインフラと再開発地区調査団」を結成し派遣した。今後の実施について WG 会議で検討した結果、今後とも会員の国際的感覚を養うための事業として何らかの形に変えても、支部行事として継続実施すべきであるとの結論を得ている。従って、今後は会員の希望等を集約したうえで検討実施することになっている。

#### (6) その他の行事

役員対象の「時の話題」を聴く会として 1988 年から継続実施している「懇話会」は、年 2~3 回実施して 15 年間で延べ 38 回を数えている。技術研究発表会については、発表件数が年々増加して 1997 年以降は 400 件を超える応募が有り、1989 年に創設した発表論文を対象とした技術三賞（総合技術賞、技術開発賞、論文奨励賞）の表彰制度も定着し、毎年次年度の支部通常総会時に表彰式を実施し、その成果を讃えると共に支部の活性化を図っている。コンクリート示方書改訂等の各種講習会の実施は仙台地区に集中しがちであるため、出来るだけ地方会員の参加機会を設けることを目的に、「技術講座と映画の会」を各県持ち回りで開催し、2003 年からは技術推進機構との共催行事として継続教育プログラムの地方版として定着している。継続教育については、支部開催行事は勿論のこと他機関主催行事についても積極的に共催や後援を行い、プログラム認定申請を行って受講機会を出来るだけ多くすることに心がけている。

#### (7) 規約等の整備等

1998 年に土木学会定款の改正に伴う支部規程の大幅な見直しをするため、11 月に「東北支部規程等検討委員会」を設置し、本部規程改正 WG から示された共通規程部分を考慮した支部規程案を作成し、1999 年度通常総会に承認を得て制定している。その後、支部規程を受けて就業規則、旅費規程、給与内規、慶弔に関する

る内規、支部商議員の委任について（申合せ事項）等の諸規定の整備を諮っている。

また、東北地方は、過去において度々甚大なる自然災害を受けており、また昨年は震度6級の地震が発生している。そのうえ、宮城県沖を震源地する大地震が、今後30年の間に90数%もの非常に高い確率で、発生が予測されていること等に鑑み、早急に支部として災害対応体制づくりをする必要があることから、これに先駆け不時の大災害発生に対応するための「緊急災害調査基金制度」を2004年度の総会において創設し、更に「緊急災害対策WG」を組織して詳細なる体制確立の検討に入っている。

【渡部 保雄】

## 11.5 関東支部

### 11.5.1 沿革

1963年から1年間の準備期間を経て1964年4月30日の発明会館ホールにおいて設立総会が開催され発足し、活動を開始した。

1995年以降の関東支部歴代支部長・幹事長は表-1の通りであるが、この間の支部としての活動も活発化したこともあって、1998年から副幹事長制度を設けて対応することとなった。

支部事務局は、創立以来、本部職員が兼務で支部の事務処理を担当してきたが、長い間の懸案であった支部事務所の独立については、ようやく四谷3丁目に新しい事務所を開設し、1997年7月1日より執務を開始した。

当支部も1993年をもって、支部創立30周年を迎え、所属会員も15,000名（全会員の44%）を数えるに至り、本部の創立80周年記念事業に合わせ、支部創立30周年記念国際シンポジウム「21世紀のアジアの建設業—社会基盤設備と管理運営の課題—」を1994年11月23日にパシフィコ横浜において開催する。

一方で、工学の原点である「ものづくり」の楽しさを若い学生に経験をすることを目的に「土木系学生によるコンクリートカヌー大会」を1995年に第1回を開催してから、年々盛況になり、今2004年で第10回を迎えた。

### 11.5.2 支部活動

支部運営にあたっては、総会、役員会、幹事会などを設け、事業推進のための各種事業を企画、実施をしている。

その内容は、「技術研究発表会」「講演会」「見学会」などを開催している。また、8年ごとに開催する「全国大会」や「海外技術調査団」の派遣をも含めて支部所属会員にたいしても技術知識の向上と啓蒙に努めている。

#### (1) 技術研究発表会

技術研究発表会は、支部創立10周年を記念して始められた支部行事でも中心的事業である。2003年度は、第31回の技術研究発表会が防衛大学校で開催された。

技術研究発表会の発表の効率化をはかるために、講演申し込みを本部、他支部に先駆けて2001年度（第29回・山梨大学）より電子申し込み方式を導入し、2002年度（第31回・新潟大学）より、講演申し込みならびに原稿も電子入力し、講演概要集もCD-ROM化を実施した。

#### (2) 全国大会

全国大会は、従前通り8支部でもち回り開催となっている。本部の申し込み方法も電子申し込みになったため、発表方法も電子化が進んでおり、運営自体も変わりつつある。

1997年（第52回）は、大会テーマ「みつめよう土木の原点とフロンティア技術」と決め、会場を多摩にある中央大学（講演数：7部門・3,682題、参加者数：延べ22,000名）に移し、諸行事が開催された（表-2）。

また、2005年（第60回）は、会場を都内の早稲田大学にて開催準備中である。

表-1 関東支部歴代支部長・幹事長一覧

| 年度   | 支部長          | 幹事長           |
|------|--------------|---------------|
| 1995 | 成田信之（東京都立大学） | 佐々木豊（鹿島建設㈱）   |
| 1996 | 同上           | 同上            |
| 1997 | 同上           | 同上            |
| 1998 | 戸田隆志（清水建設㈱）  | 藤野陽三（東京大学）    |
| 1999 | 同上           | 同上            |
| 2000 | 町田篤彦（埼玉大学）   | 今井義明（大成建設㈱）   |
| 2001 | 同上           | 同上            |
| 2002 | 伊藤喜栄（大成建設㈱）  | 二羽淳一郎（東京工業大学） |
| 2003 | 同上           | 同上            |
| 2004 | 依田照彦（早稲田大学）  | 井手和雄（清水建設㈱）   |

表-2 全国大会主要行事一覧

| 年度・支部             | 開催場所                    | 開催期日          | 特別講演題目・講演者など  | 年講回数・題数       | 懇親会場             | その他の特別行事・備考  |
|-------------------|-------------------------|---------------|---|---------------|------------------|--|
| 平成9<br>関東<br>1997 | 中央大<br>学多摩<br>キャン<br>パス | 9.10～<br>9.12 | ・来賓挨拶 柳 福<br>模 ・安全な生活, 強い産<br>業を支える社会資本整備<br>宮崎 明<br>・土木的時間と空間の拡張<br>鈴木隆介<br>(研究討論19, 見学3, 映<br>画40「黒部の太陽」, ビデ<br>オ41, 土木技術パネル展<br>「みつめよう “土木の原点とフロンティア技術”」 | 第52回<br>3680題 | 京王ブ<br>ラザホ<br>テル | ●市民参加行事<br>・講演会 (9/6) 「まちづくりは人づくり」<br>: ケントギルバート<br>・パネルディスカッション: テーマ「都市と環<br>境—人と自然と風土をいかしたまちづくり—<br>(9.6) ・映画会 (9.6)<br>・写真展 (9.8～12)<br>・土木技術パネル展 (9.10～12) |

| 年次学術講演会における総合講演・部門講演・研究討論会等のテーマ             |   |
|---|---|
| 開催期日  | テーマ   |
| 平成9年<br>(1997)<br>9.10～12<br>中央大学           | (研究討論会)   |
|   | 1. 全国大会をどう改善するか?—肥大化の構図と変革への展望—<br>(家田/為国・堀・山口・支部担当者・実務者・学生)        |
|   | 2. 学会における出版活動はいかにあるべきか<br>(三上/高松・鈴木・長)                              |
|   | 3. 国際的資格と工学教育評価認定制度<br>(北浦/樺沢・吉田・松井・館・原田・草柳・廣谷・五老海)                 |
|   | 4. 21世紀に向けた沿岸域のあり方<br>(三村/西口・山口・勝井・佐野)                              |
|   | 5. 社会資本整備におけるライフサイクルコストの縮減と建設コンサルタント<br>(駒田/稲村・光家・大野・吉野・渡辺)         |
|   | 6. TBMは日本の地質を克服できるか<br>(西松/須賀・三浦・小山・領家・宇賀)                          |
|   | 7. 耐震設計基準の改定の現状と課題—土木学会の提言は関係機関にどう反映されたか—<br>(西村/運上・松尾・濱田・上部・白水・太田) |
|   | 8. 鋼橋の経済性と長寿命化を目指して<br>(長井/小川・高橋・西川・松井・依田)                          |
|   | 9. エネルギー土木施設の耐震性と今後の展開—阪神淡路大震災を踏まえて—<br>(片山/国生・山崎・後藤・宮本・松本・小川・当麻)   |
|   | 10. コンクリート構造物の次世代設計法のゆくえ<br>(前川/堀・坂井・北村・市之瀬)                        |
|   | 11. 首都圏直下地震への即応体制<br>(東原/岡田・菊池・島田・三木・灘岡)                            |
|   | 12. 景観とデザインの研究・教育・実践の足跡と将来<br>(中村/北村・篠原・田村・岡田・大野)                   |
|   | 13. 21世紀の社会資本整備に向けての建設技術開発のあり方<br>(漢那/堀井・渡辺・高津・石橋・田中)               |
|   | 14. 鋼・コンクリート複合構造の現状と将来—新しい設計・施工の方向を目指して—<br>(園田/池田・安松・横田・上田・保坂)     |
|   | 15. 地球温暖化の予測と防止—21世紀への戦略—<br>(北田/住・加藤・松岡・青山)                        |
|   | 16. 交通への公共投資を考える<br>(黒川/佐藤・高松・竹内・森地)                                |
|   | 17. 水域環境のためのエコテクノロジーの評価と研究の視点<br>(橋田/沖野・古米・土屋・関根)                   |
|   | 18. 土砂災害・土砂管理・危機管理<br>(山田/江頭・辻本・宮本)                                 |
| 19. 土木文化財としての玉川上水<br>(高橋/新谷・進士・西谷・木田・島井・神吉) |   |

### (3) 講演会・講習会・映画会・見学会など

支部会員への啓蒙活動とともに、一般市民への広報活動として、時宜を得た話題を取り上げて、年数回の行事を広く行って来た。たとえば、講演会として「阪神・淡路大震災速報講演会」(1995年)、「水とたたかい・水からの恩恵」(2003年)など、多岐にわたっている。

講演会は、「土木景観」(1990年)、「使えるCG/CAD」(1994年)、「生態系の保護と社会基盤整備」(1996年)、「21世紀のより効率的な社会資本整備に向けて」(1999年)、「21世紀の技術者に求められるマネジメント能力」(2001年)、「都市再生とこれからの技術者像を考える」(2003年)、「都市再生」(2003年)を取り上げ、その時代に即応した講習会の開催のほか、中学生新聞記者講習会、会員間の意見交換のための「KANTOシビックサークル」ならびに、テーマを含めて専門家を囲んでお話を聞く「談話会」などなどを企画、開催

してきたが総じて評価は高い。なかでも1990年以来開催している「土木技術者に求められる資質と素養－技術士を目指している方々のために－」の講習会は、毎回好評を博している。

見学会は、会員を対象としたものと、「土木の日」の行事の一環として一般市民を対象としたもののほか、親子を対象にしたものがあり、2003年には、「山梨リニア実験線」においてリニアモーターカー試乗を実施した。

「土木の日」関連では、各建設会社の協力を得て小学生を対象とした研究所の開放を実施将来の土木技術者の育成とともに土木への理解者を増やすべく、行っている。

また、6回目を迎える「土木とくらし写真コンテスト」を「土木の日」関連行事として実施している。

### 11.5.3 記念事業

1993年創立30周年を迎え、記念事業として国際シンポジウム「21世紀のアジアの建設業－社会基盤整備と管理運営の課題－」を土木学会創立80周年記念事業とタイアップしてパシフィコ横浜において開催した。

### 11.5.4 ブランチ活動について

現在、関東支部は、新潟会、山梨会、群馬会、栃木会の4つのブランチがあり、それぞれ特色のある活動を行っている。それぞれの会の運営は、それぞれの組織から選ばれた幹事により運営され、技術者対象の研修会、見学会などを企画開催している。

関東支部のブランチの中では遅く、1996年10月18日に「土木工学の進歩および土木事業の発展に寄与すること」を目的に設立されたのが、「関東支部栃木会」である。

ほかのブランチと同じように土木工学および土木事業における技術発表会、講習会、講演会、視察、見学会などの実施のほか、調査研究、奨励、援助、図書その他資料の収集、保管、普及、広報、および会員相互の親睦（親ぼく）に関する事業を域内の技術者、研究者を対象に独自の企画を行っている。

特別の事業として、会員名簿、広報誌の発行、「とちぎの土木遺産（栃木県の近代土木遺産?）」ルートマップの作成を検討中である。

### 11.5.5 事務局

支部活動の活性化による事務量の増大と多様化に対処するために、長年の懸案であった自前の事務所を、1997年7月1日に四谷3丁目に新事務所を開設し、専従職員を採用し（表-3）、活動を開始し現在に至っている。

表-3 関東支部歴代事務責任者

| 就任期間          | 職名    | 氏名   | 本部所属課 |
|---------------|-------|------|-------|
| 1994.6～1997.5 | 事務責任者 | 飯田克子 | 会員課   |
| 1999.6～       | 事務局長  | 鈴木勝芳 | 専属職員  |

[鈴木 勝芳]

## 11.6 中部支部

中部支部は、土木学会第4番目の支部として、1938年5月29日に設立された。初代支部長は杉山栄氏（矢作水力）であった。現在は官庁、民間、大学が持ち回りで担当している。支部役員は、支部長1名、幹事長1名、以下、顧問、商議員（50名以内）、幹事（50名以内）、事務局という構成になっている。実際の支部活動は幹事が立案し実施している。設立以来の支部長、幹事長名を一括して表-1に示す。支部事務局は設立当初は支部長の所属する職場に持ち回りで設置されていた。しかし、1973年に中部科学技術センター内に、土質工学会中部支部と共有で開設し、1997年11月1日より、現在のポーラ名古屋ビル内に事務局を移転し今日に至っている。なお、地盤工学会中部支部（1995年5月土質工学会中部支部から改名）との事務局共有は現在も継続している。また、以下のように専任事務員を配置している。横地房代（1973～76）、杉浦久美子（1976～80）、後藤邦予（1980～86）、平林薫（1986～88）、富永敏子（1990～2002）、鶴飼峰子（2001～現在）。

中部支部は当初、愛知県、岐阜県、三重県、静岡県、福井県、石川県、富山県、長野県の8県を管轄区域として活動してきたが、1952年5月には福井県が関西支部に編入されることとなったため、以後今日に至るまで福井県を除く中部7県を対象として支部活動を行っている。

支部活動としては、4月の支部総会に始まり、毎月1回の幹事会、年に3回の商議員会、年に数回の講演会、講習会、技術講座、見学会、留学生交歓会などを実施してきている。さらに、土木の日関連行事として、イベント、市民見学会などを実施している。そして、年度の締めくくりとして、3月に研究発表会を実施しており、これらは定着した行事となっている。また、1998年にホームページを開設し、積極的にホームページを利用して支部活動を展開している。現在のURLは <http://www.jsce.or.jp/branch/chubu/> である（図-1）。

これらの事業は従来幹事会全体で立案し実施してきたが、1996年より幹事会のメンバーでワーキンググループ（以下WG）を組織し、活発に各種事業活動を行っている。現在は以下のように5つのWGが組織されている。（1）企画調整WG：支部活性化のための立案、次年度の体制の原案作成、長期構想の策定および幹事会から諮問された事項を担当。（2）広報WG1：土木の日関連行事、市民見学会等の企画と実施の支援を担当。（3）広報WG2：ホームページ等を通じた学会員および市民への広報活動の支援を担当。（4）講習会WG1：支部講習会および技術講座の企画と実施の支援を担当。（5）講習会WG2：支部研究発表会の企画と実施の支援を担当。

支部研究発表会は、1951年にスタートした当時12題しか投稿がなかったが、この10年はコンスタントに300題以上の投稿件数があり、多いときには400題を超えることもあった。参加者も毎回400名から600名程度あり、盛況を呈している。

中部支部が担当する年次学術講演会は、1949年の第5回大会が最初の開催であった。この10年間では、1996年に第51回年次学術講演会が名城大学を会場として開催された。延べ25000人を超える参加者があった。

この10年間に実施した土木の日関連市民向け行事をまとめると以下の表-2のようになる。この表からもわかるように、土木学会80周年を機に、市民向けの事業に勢力的に取り組んできたことがわかる。

1995年には木曾三川などをモチーフにしてデザインされた、中部支部のロゴマークが決定され、ホームページや封筒などに利用されている。図-1, 2参照。1996年には中部支部より第84代土木学会会長（松尾稔：名古屋大学）を選出し、その勢いに拍車がかかった。1997年には事務所を移転し、体制を整えた。また、ブレ60周年記念事業として、1997年に名古屋港のシンボリック的存在となっている名港トリトン（三連の斜張橋で伊勢湾岸道の一部）の開通前に、名港トリトンウォークを開催した。

1998年には中部支部創立60周年を迎え、「一私が見たい21世紀の風景 土木の役割」と題して以下に示すようないくつかの事業を実施した。（1）60周年記念誌の発行（1999年3月、図-3）。（2）名古屋城内にある名古屋能楽堂での、記念式典、シンポジウムを開催した（図-4）。（3）見るエッセイと懸賞論文を

募集し、多数の応募があった。入選作品は支部のホームページにて、現在でも閲覧が可能になっている。

2000年には一般市民向けのシリーズ物の講座として、市民ゼミナールを開催した。2002年からは小中高生などを対象として、土木の専門的な内容をやさしく解説することで、土木の認知度を高めるとともに土木事業の重要性を啓蒙するための出前講座を実施した。現在までに2件の出前講座を実施したがいずれも好評であった。

その他の事業として、1997年に土木工学における各種のテーマに関して調査研究を行い、土木技術水準の向上に寄与することを目的として調査研究員会が組織され、リサーチグループおよびワークショップの募集を行った。そして、1998年からこれらの研究活動への補助を開始した。また、2001年より自治体や大学・高専の学園祭などが主催するイベントへの補助を開始した。

このように中部支部では、この10年間一般市民向けのサービスと会員向けのサービスの両方に力を注いで活動を行ってきた。今後もPIの精神も取り込みながら、同様な方針で更なるサービス向上を目指すものである。

表-1 中部支部における歴代支部長および幹事長一覧

| 年度   | 支部長    | 幹事長    | 年度   | 支部長    | 幹事長    |
|------|--------|--------|------|--------|--------|
| 1938 | 杉山 栄   | 北沢 忠男  | 1973 | 西畑 勇夫  | 足立 昭平  |
| 1939 | 北澤 忠男  | 塚本 積   | 1974 | 八田 晃夫  | 小林 郁夫  |
|      |        | 千田 正重  | 1975 | 黒田 晃   | 小林 浩二  |
| 1940 | 田淵 寿郎  | 比企野 広治 |      | 永井 淑郎  | 笠原 繁雄  |
| 1941 | 田淵 寿郎  | 比企野 広治 | 1976 | 山本 有三  | 片山 英吉  |
| 1942 | 永田 民也  | 比企野 広治 | 1977 | 市原 松平  | 植下 協   |
| 1943 | 花井 又太郎 | 比企野 広治 | 1978 | 中本 正則  | 東 義雄   |
| 1944 | 富永 正義  | 比企野 広治 | 1979 | 小林 浩二  | 今村 浩三  |
| 1945 | 富永 正義  | 比企野 広治 | 1980 | 小林 郁夫  | 田中 美三  |
| 1946 | 富永 正義  | 比企野 広治 | 1981 | 細井 正延  | 吉田 弥智  |
| 1947 | 鈴木 鹿象  | 綾 亀一   | 1982 | 金屋敷 忠義 | 宮原 克典  |
| 1948 | 佐々木 銑  | 綾 亀一   |      | 本山 蒨   |        |
| 1949 | 佐々木 銑  | 綾 亀一   | 1983 | 杉山 孝雄  | 山下 武   |
| 1950 | 比企野 広治 | 新井 利一郎 |      |        | 大島 弘   |
| 1951 | 立神 弘洋  | 奥田 秋夫  | 1984 | 多田 尚夫  | 井上 昭栄  |
| 1952 | 石川 栄次郎 | 高桑 鋼一郎 | 1985 | 深谷 一   | 磯部 節彦  |
| 1953 | 松本 金吾  | 松見 三郎  | 1986 | 大橋 雄六  | 石井 晃一  |
| 1954 | 大林 勇治  | 竹重 貞蔵  | 1987 | 原口 好郎  | 花木 喜彦  |
| 1955 | 杉戸 清   | 鈴木 和平  | 1988 | 川本 眺万  | 高木 不折  |
| 1956 | 前田 一三  | 鈴木 誠一  | 1989 | 藤井 治芳  | 和里田 義雄 |
| 1957 | 石田 二郎  | 井上 幸太郎 | 1990 | 石井 晃一  | 伊佐治 敏  |
| 1958 | 中島 武   | 谷藤 正三  | 1991 | 河本 毅一  | 鳥居 久人  |
|      | 梶谷 薫   | 渡辺 豊   | 1992 | 内田 敏久  | 初田 収蔵  |
| 1959 | 大谷 英   | 田所 文男  | 1993 | 吉田 彌智  | 松井 寛   |
|      |        | 桑山 三郎  | 1994 | 蛇川 雄司  | 浅沼 宏明  |
| 1960 | 橋本 規明  | 渡辺 新三  | 1995 | 小柳 洽   | 小尻 利治  |
| 1961 | 吉川 吉三  | 豊田 栄一  | 1996 | 尾田 栄章  | 横塚 尚志  |
| 1962 | 中谷 茂一  | 土方 大次  |      | 井上 靖武  |        |
| 1963 | 松見 三郎  | 渡辺 清則  | 1997 | 河上 省吾  | 岩田 好一朗 |
| 1964 | 井上 幸太郎 | 谷 重幸   | 1998 | 伊佐治 敏  | 安田 勝一  |
| 1965 | 北村 正之  | 伊藤 純三  | 1999 | 犬飼 隆一  | 安藤 晟光  |
| 1966 | 榎 修仁   | 永谷 譲二  | 2000 | 山本 邦夫  | 丸井 国治  |
| 1967 | 渡部 時也  | 奥村 徳太郎 | 2001 | 松井 寛   | 山本 幸司  |
| 1968 | 佐々木 正久 | 黒田 晃   | 2002 | 本多 啓   | 野田 豊範  |
| 1969 | 松本 文彦  | 打田 富雄  | 2003 | 大根 義男  | 四俣 正俊  |
| 1970 | 谷 重幸   | 伊藤 徳男  | 2004 | 村田 進   | 柳川 城二  |
| 1971 | 片山 直梢  | 本多 博   |      |        | 木下 誠也  |
| 1972 | 土方 大次  | 水野 忠   |      |        |        |

表-2 土木の日関連市民向け行事一覧

| 年度   | 土木の日関連行事   | 市民見学会（開催地：内容）  | 関連事項                       |
|------|--|--|----------------------------|
| 1994 | 講演会「私の取材ノートから」<br>パネルディスカッション「土木技術と文明文化」<br>東海道ルネッサンス記念コンサート | 名古屋市：いにしえと未来の東海道を訪ねて<br>三重県：土木技術の変遷<br>長野県：天竜川の源、諏訪湖を訪ねて   | 土木学会 80 周年                 |
| 1995 | 土木の日開始式「くらしを支える過去の遺産－土木技術者の功績－」                              | 石川県：水と緑の回廊、能登島を訪ねて<br>静岡県：伊豆半島に展開される土木施設を訪ねて<br>愛知県：豊・潤・速（レクリエーション時代の土木に触れる）                               | 支部ロゴマーク決定                  |
| 1996 | パネル・写真展<br>於：金山総合駅   | 岐阜県：私たちの生活につながる土木の仕事<br>富山県：豊かな水と緑、賑わいのある国際交流都市“新川”の土木施設めぐり<br>名古屋市：いにしえの東海道を訪ねて                           | 第 51 回年次学術講演会（於：名城大学）      |
| 1997 | パネル・写真展「地域をつなぐ土木の世界」<br>於：金山総合駅                              | 長野県：オリンピックを迎える舞台を見よう<br>三重県：山から海までの公共施設を求めて<br>愛知県：愛知万博・文化の地・21 世紀の地を訪ねて                                   | 支部事務所移転                    |
| 1998 | シンポジウム「トンネル空間が変わる一人に優しい地下空間デザインを目指して－」                       | 名古屋市：都市を支える基幹施設をたずねて<br>静岡県：たずねてみよう、夢の舞台づくりの現場から生活関連施設まで<br>石川県：金沢城跡から 21 世紀の副都心をたずねて                      | 中部支部 60 周年<br>ホームページ本格運用開始 |
| 1999 | 土木の日見学会「岐阜市鏡岩排水池・第 2 名神揖斐川・木曾川橋架設現場、霞セグメントヤード」               | 岐阜県：環境をキーワードに身近な土木施設をたずねてみよう<br>富山県：まずは安全に、もっと身近に、さらに快適な“とやま”を目指して<br>愛知県：身近にある土木プロジェクトめぐり                 |                            |
| 2000 | 土木の日見学会「名古屋港周辺クルージング」  | 長野県：大型橋梁工事、地すべり対策、下水道処理の取り組み<br>三重県：土木施設と海のかかわりを考えよう<br>名古屋市：鉄道のかこ・げんざい・みらいを訪ねる                            | 市民ゼミナール開催                  |
| 2001 | 土木の日見学会「第 2 名神高速道路木曾川橋ウォーキング」                                | 静岡県：しずおか国際園芸博覧会パシフィックフローラ 2004 とメインアクセス（長大橋梁）<br>石川県：城下町金沢から 21 世紀の都市づくりの響きを聞こう<br>愛知県：世界へ発信する中部のプロジェクトツアー |                            |
| 2002 | 土木の日見学会「環境にやさしい高速道路見学会」                                      | 岐阜県：見て、聞いて、ふれて知る 西美濃水源地の旅<br>富山県：未来を拓くとやまの土木<br>名古屋市：水の流れをめぐる旅   | 出前講座                       |
| 2003 | シンポジウム「土木のプロジェクトを支えた戦士たち」                                    | 長野県：見てみよう自然と共生する土木事業<br>愛知県：新しい中部の玄関口「セントレア」を見に行こう<br>三重県：未来へつながる道づくり、環境づくり                                | 出前講座                       |



図-1 中部支部ホームページ

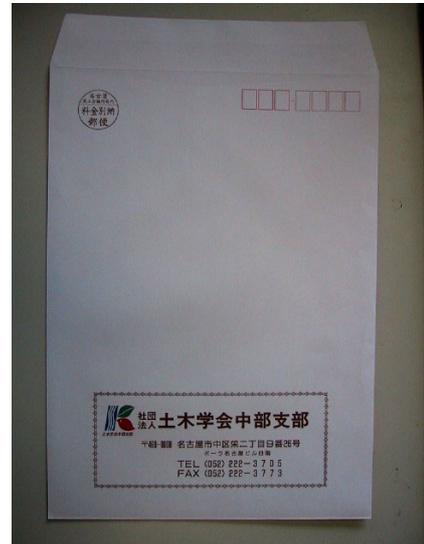


図-2 中部支部封筒



図-3 60周年記念誌



図-4 60周年記念シンポジウム案内チラシ

[鈴木 森昌]

## 11.7 関西支部

### 11.7.1 支部設立の経緯

学会支部では最も古く、1927年12月16日に設置が議決され、発会式が1928年1月28日に中央電気倶楽部で開催された。前史については「関西支部創立60,70周年記念誌」および「40,50,60,70,80年略史」に詳しいので参照していただきたい。

1994年から2004年にかけての約10年は、関西支部にとっては1994年9月4日の関西国際空港の開港、1995年1月17日の阪神・淡路大震災の発生、1998年4月5日の明石海峡大橋の開通とまさに激動の時期だったと言える。そして、阪神・淡路大震災の復旧・復興とともに歩んだと言っても過言でない。

### 11.7.2 阪神・淡路大震災調査研究委員会

阪神・淡路大震災は未曾有の人的・物的被害を生ぜしめた。これは1923年の関東大震災以来の規模の災害であり、さらに大都市直下での活断層の活動による地震という観点において、これまで経験したことの無いものであった。

土木学会本部をはじめとして多くの団体が被害調査のためのチームを派遣していたが、いずれも被害の実情を調査するためのものであり、被害に関しての一次資料の収集に重きを置いたものであった。そのなか、関西支部は被災の地元でもあり、単なる被害調査のみならず、被害資料に基づく研究にまで踏み込んだ調査研究を目標とすべきとの結論に達し、1995年2月に阪神・淡路大震災調査研究委員会を組織し、3年間にわたって活動を行った。

委員会で調査・研究の対象とした範囲は、地震と土木をキーワードとする全ての事象であり、以下の8つの分科会を設けた。

表1 阪神・淡路大震災調査研究委員会[敬称略]

|             |             |                                       |
|-------------|-------------|---------------------------------------|
| 委員長         | 土岐憲三 (京都大学) |                                       |
| 副委員長        | 松井 保 (大阪大学) |                                       |
| 幹事長         | 家村浩和 (京都大学) |                                       |
| 分科会<br>委員長  | [地震活動]      | [地盤・基礎]                               |
|             | 尾池和夫 (京都大学) | 松井 保 (大阪大学)                           |
|             | [鋼構造]       | [コンクリート]                              |
|             | 福本昤士 (福山大学) | 藤井 学 (京都大学)<br>小野紘一 (京都大学) 1997年10月より |
| [地下構造物]     | [ライフライン]    |                                       |
| 櫻井春輔 (神戸大学) | 亀田弘行 (京都大学) |                                       |
| [緊急対応]      | [復旧・復興]     |                                       |
| 林 春男 (京都大学) | 黒田勝彦 (神戸大学) |                                       |

それぞれの分科会には多くの研究者や技術者が参加し、その総数は最終年度には250名に達し、まさに関西支部を挙げての大調査委員会となった。分科会の開催回数は延べ110回を超えた。

この委員会では下記のとおり3回の報告会と1回の講習会を開いて、委員会としての研究成果を会員及び一般に対して報告するとともに、報告書「大震災に学ぶ」は支部創立70周年記念事業の一環として1998年6月に出版し、高い評価を得た。

- (1) 阪神大震災調査委員会報告  
1995年5月20日／立命館大学／200名
- (2) 「耐震地震防災の基礎」講習会  
1995年12月8日／建設交流館／151名
- (3) 阪神・淡路大震災調査研究委員会中間報告会  
1996年9月5～6日／インテックス大阪／420名
- (4) 阪神・淡路大震災調査研究委員会最終報告会

「阪神・淡路大震災から技術者が学んだこと」

1998年6月9～10日／神戸朝日ホール／779名

なお、「明日の豊かな都市づくりのために」をテーマに、「都市防災フォーラム&メッセ'96」が1996年9月4日～7日の4日間にわたって、インテックス大阪で開催されたが、このイベントは「阪神・淡路大震災調査研究委員会中間報告会」をメインに、「自治体フォーラム」、「防災技術メッセ」の3部構成で行われ、参加者は延べ約1万人に達した。

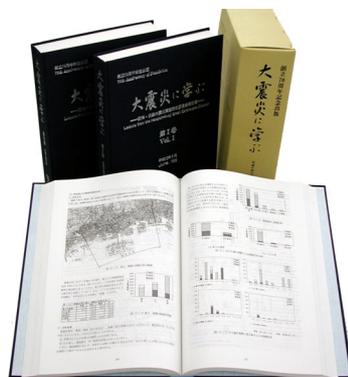


写真1 阪神・淡路大震災調査研究委員会報告書「大震災に学ぶ」  
(題字は土岐憲三委員長)

### 11.7.3 魅力創り委員会

魅力あふれる関西支部を創るため、魅力創り委員会が1995年度に発足し、1年間の審議を経て1996年5月8日の総会において支部長あてに答申された。

表2 魅力創り委員会[敬称略]

|     |                     |                   |
|-----|---------------------|-------------------|
| 委員長 | 片瀬貴文 (中央復建コンサルタンツ株) |                   |
| 委員  | 芦田 淳 (南海電気鉄道株)      | 芦見忠志 (★大阪市土木技術協会) |
|     | 井越将之 (大阪市)          | 白石成人 (京都大学)       |
|     | 高田至郎 (神戸大学)         | 田中泰雄 (神戸大学)       |
|     | 早川知夫 (関西電力株)        | 前川滋夫 (佐藤工業株)      |
|     | 渡邊英一 (京都大学)         | 渡部 威 (関西電力株)      |

提言は、理念、組織、行事、広報、財務の各部門に対して緊急度別に分類され、支部創立70周年記念事業をはじめ、支部の発展に大きく貢献した。

### 11.7.4 支部創立 70 周年記念事業

1997年に創立70周年を迎えるのを記念し、以下のような行事・企画を行った。

- (1) 記念式典・記念講演会・記念祝賀会

1997年10月24日／大阪厚生年金会館／415名

- (2) 記念出版

- 1) 土木学会関西支部創立70周年記念誌

—21世紀に向けて 支部10年の歩みと震災対応記録集—

- 2) 阪神・淡路大震災調査研究委員会報告書「大震災に学ぶ」

- (3) 記念シンポジウム「我が町の防災はこう変わった」

1997年9月20日／御堂会館／393名

- (4) 懸賞論文 テーマ：情報化社会における土木のあり方

特選論文：林 健二 (中央復建コンサルタンツ)

佳作論文：山岡 暁 (ニュージェック)，西田 純二 (阪急電鉄)

- (5) 海外学術・技術交流事業

- 1) 「関西支部会員加害派遣研修援助制度の歩み」 発刊

2) 海外科学技術交流懇話会

1997年12月4日／関西大学／140名

(6) 市民対象行事

1) わが街の土木発見

1997年11月8日／近畿2府4県11箇所の建設現場／257名

2) 土木の日開始式

1997年11月15日／リサイタルホール／173名

3) 土木と歴史「みつけよう歴史の足跡」

1997年12月14日／関西大学／135名

土木遺産調査隊と称するモニターを市民32組に依頼し、生活の中の土木の歴史に関する調査を行っていたものである。いずれも劣らない作品の中から優秀作品の10グループを選び、表彰した。

4) 明石海峡大橋橋上イベント

1998年3月26日／明石海峡大橋／560名

4,000名をこえる応募者の中から選ばれた次世代を担う小中高生を含めた560名の参加者による「土木の日」の人文字は、陽春の光に映え見応えがあり、今世紀最大のプロジェクトへの関心の高さをうかがわせた。



写真2 明石海峡大橋橋上イベント 人文字

(7) その他

1) ロゴマークをカラー化

2) 関西支部ホームページの開設

(<http://www.jscekc.civilnet.or.jp/>)

3) 支部会員名簿の作成

4) 市民会友制度の創設



写真3 関西支部創立70周年記念誌(左)



写真4 支部創立70周年ポスター(右)

### 11.7.5 全国大会

1998年度の全国大会は、10月4日～6日の3日間、神戸大学を主会場として開催された。全国の皆様のご支援により震災から復興した神戸の姿と、20世紀最大のプロジェクトである明石海峡大橋の開通を、全国の土木技術者・研究者の方々にご覧いただくために、神戸で開催したものである。こうした意味を込めて、大会のメインテーマには「安心と活力あるまち創り・くに創り」を掲げた。

幸い大会期間中は晴天に恵まれ、特別講演会、特別シンポジウム、第53回年次学術講演会、研究討論会、交流会、映画会、見学会といった行事に全国から多数の参加者が得られた。また、同時に企画した市民参加行事も盛況であった。

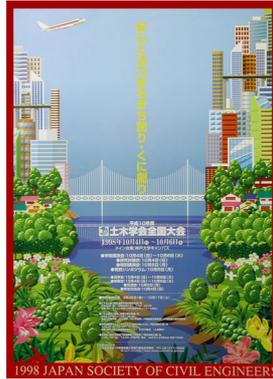


写真5 1998年度全国大会ポスター

### 11.7.6 将来構想特定幹事会

支部の将来の総合的な戦略を構想する目的で、1999年度に将来構想特定幹事会（主査：田村 武（京都大学））が設置され、これからの社会資本整備推進のための産官学の連携強化を図る手段の具体化として「大学院学生のインターンシップ推進」、「小中学生教育における総合的な学習の時間（総合学習）支援」、「大学教育におけるプロジェクト授業支援」を3つの柱に活動を開始している。

インターンシップでは、2000年夏季休暇中に官公庁および民間企業に派遣した。総合学習支援では大阪府松原市教育委員会との連携により、市内小中学校における出張教育を行い、マスコミにも取り上げられるなど社会の関心が高い内容であった。また、プロジェクト授業では、神戸大学において「関西国際空港の立地計画と護岸の設計・施工」をテーマに演習形式の授業を企画・実施し、学生にも好評であった。現在、常設幹事会で進めている。

### 11.7.7 市民参加行事・「土木の日」関連行事

1988年度から関連10協会との共催が確立、支部創立60周年記念事業で打ち出した市民参加行事として小中高生対象見学会、市民見学会等を毎年活発に開催し、総合学習の支援にも取り組み、教材作成、人材・教材・資料などの情報提供を行い、支援授業を実施している。

1987年11月18日に提唱され創設された「土木の日」を受けて、関西支部も1993年度に「土木の日」関連行事関西地区連絡会を設立し、学・官・民一体となって関連行事を実施している。

1994年11月20日には「土木学会創立80周年」の支部関連行事として、ミステリアスクルージングを行った。言葉のとおり、行き先は秘密であったが、フェリーで建設中の明石海峡大橋と開港したばかりの関西国際空港を訪れるものであった。途中船上ではマリンコリドール構想に関する講演、スパゲティープリッジコンテスト、ビデオ上映などが開催され、総勢700名で賑わった。

1997年度から「土木の日」関連行事関西地区連絡会の諸行事を市民の方々や土木技術者に広く広報し、また、土木のイメージアップをはかるため「土木の日ポスター」の一般公募を始めた。2000年には「土木に携わる人たち、子供たちへのメッセージソングにしよう」との思いから「土木のうた」を公募したところ、石

原文明氏、本田秀雄氏の作品が優秀賞に選ばれ、「僕はドボッ君」、「夢風船」の2曲が完成し、CD化され、表紙には「土木の日ポスター」の2000年度最優秀賞に輝いた勝井泰生君（福知山市立大正小学校2年）の作品を採用させていただいた。

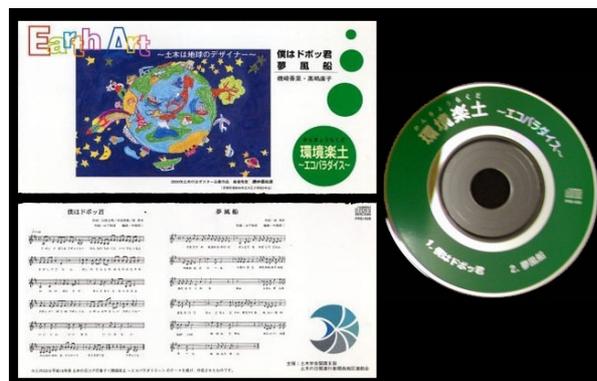


写真6 「土木のうた」CD

### 11.7.8 支部技術賞

1982年度より支部技術賞の制度を設け、土木技術の進展に顕著な貢献をした優れた業績に対して、総合および分野別の2部門に分けて表彰してきた。

その後、応募件数の増加とともに、応募業績が各部門に適切に区分されているかという問題点も生じてきたことから、1997年度よりこの応募区分を廃止し、一括で募集・選考を行うこととした。

また、1998年度からは予選通過者による各自業績の説明会を公開、毎年多くの一般会員の傍聴を得ている。

### 11.7.9 会員海外派遣研修援助制度

1988年度に会員海外派遣研修援助制度の基金を創設し、特別会計を設置し運営してきた。当初は学生だけを対象としていたが、1995年度からは社会人にも門戸を開放している。毎年3～7名程度の学生・社会人をアジア、欧米はもとより、オセアニア、アフリカなど世界各地へ派遣している。その成果は、学生は学生映画会が開催される数校において報告される一方、社会人は新春講演会・交流会において報告されている。

2003年度までの派遣人数は延べ83人に達したが、基金そのものが減少し、年々厳しい対応を余儀なくされている。しかし、資金が枯渇するまでは従来と同様の事業を継続し、運用方法や要望を含めて検討することとしている。

### 11.7.10 フォーラムシビルコスモス

フォーラムシビルコスモス（略称FCC）は、土木界が抱えるさまざまな課題を検討し、21世紀の社会資本整備の円滑な実施と豊かな国土づくりの進展のために、土木界がいかに対処すべきかを議論し、また、そのための情報の発信・受信の場として、河田恵昭京都大学教授の提唱に基づき、1990年11月18日に「土木の日」の記念事業の一環として創設されたものである。

産官学のみならず広く市民も交えた組織を目指し、関西における各種機関、企業の重責の方々からなり、土木学会関係者によらない自由な議論が可能な委員構成となっていることが特徴である。

活動当初は、FCCと会員の橋渡しとしてワーキンググループ（FCCW）を設置し、理念、広報、人材、国際化、個性化の分科会に分かれて、各分科会での活動をもとにフォーラム等の開催を行うとともに、その成果をブックレットとしてまとめてきた。

1994年11月に「どぼくとおく'94 in 但馬空港」、1995年11月に「どぼくとおく'95 in LA」、1998年10月に全国大会において研究討論会「21世紀の土木へ～土木のDNA突然変異の予感～」そして2000年11月にはFCC10周年を記念して、建設省竹村公太郎河川局長、評論家の竹村健一氏を招き、フォーラム「21世紀の土木のあ

り方を考える」、2002年3月には作家の猪瀬直樹氏を招き、フォーラム「土木構造改革に臨む」を開催するなど、ユニークな活動を行ってきた。

なお、この間にFCC、FCCW合わせて70名近い一大組織となり、効果的な活動を行うにはやや肥大化し過ぎたとの反省から、2003年度からはFCC、FCCWという二階建て構造をやめ、新FCCとしてベテラン、若手を一体化した組織で活動を再開している。

#### 11.7.11 編集関係

編集関係では、会員とのコミュニケーションの場である「支部だより」は、1972年12月創刊以来、年2回刊行しており、1997年7月には創刊25周年記念号を発刊した。従来B5版サイズであったが、1994年12月からはA4版になり、さらに2000年7月からは年1回の刊行となった。

一般書は、講談社ブルーバックシリーズで、1995年に「地盤の科学」、1998年に「川のなんでも小事典」を刊行した。

1987年に支部創立60周年記念事業として発刊した「コンクリート構造の設計・施工の基本」を1997年に第2次改訂、2003年に第3次改訂を行い「コンクリート構造の設計・施工・維持管理の基本」として刊行し、毎年研修会を実施している。

#### 11.7.12 事務局関係

支部事務局は1970年に船場センタービルに事務所を移転し、更に1995年には事務所の拡充整備を行い、専任事務職員を配置している。職員としては、1993年8月1日～1998年3月31日まで南岡伸一、1998年4月1日～2002年4月3日まで吉本孝雄が事務局長をつとめ、その後を受けて木村征典が事務局長に就任している。2004年現在、萩原由美子（1992年～）、谷ちとせ（1993年～）、町田めぐみ（1999年～）の3名が勤務している。

表3に1994年度以降の支部長、副支部長、幹事長名を一覧表として掲示した。

表3 関西支部歴代支部長、副支部長、幹事長一覧（1994～）[敬称略]

| 年度   | 支部長   | 副支部長  |       | 幹事長   |
|------|-------|-------|-------|-------|
| 1994 | 片瀬 貴文 | 江口 政秋 | 重光 世洋 | 渡邊 英一 |
| 1995 | 白石 成人 | 芦見 忠志 | 渡部 威  | 高田 至郎 |
| 1996 | 佐々木 伸 | 岩本 樹雄 | 村本 嘉雄 | 同 上   |
| 1997 | 小笹 太郎 | 藤田 徹  | 村岡 浩爾 | 池淵 周一 |
| 1998 | 足立 紀尚 | 江頭 泰生 | 原田 稔  | 同 上   |
| 1999 | 金盛 弥  | 井保 武寿 | 森 康男  | 嘉門 雅史 |
| 2000 | 御巫 清泰 | 神田 徹  | 仙波 惇  | 同 上   |
| 2001 | 松井 保  | 安藤 嘉茂 | 江見 晋  | 田村 武  |
| 2002 | 藤川 寛之 | 小田 一紀 | 手塚 昌信 | 同 上   |
| 2003 | 田宮 芳彦 | 大志万和也 | 松井 繁之 | 川谷 充郎 |
| 2004 | 池淵 周一 | 小河 保之 | 梶谷 義昭 | 同 上   |

※ 文中の所属・役職等は当時のものです。

[田宮 芳彦]

## 11.8 中国支部

### 11.8.1 支部設立の経緯

中国支部は、中国四国支部として1941年8月4日第12回理事会において設置が承認された。その後、1995年度より、四国地区が四国支部として分離独立するため、中国地区は、土木学会中国支部と名称を変更して新たにスタートした。中国支部における第1回の総会は、1995年5月19日に広島弥生会館で行われた。名称変更後の中国支部における初代支部長は、門田 博知（広島工業大学）であり、支部事務局は、従来どおり、自治会館内（広島市中区基町）に設置された。

1994年から2004年にかけての10年間は、中国支部にとっては、大きな節目の時であった。特に、四国支部の分離独立（1995年4月）は、1941年から続いた体制が大きく変わることになり、支部の運営に少なからず変化をもたらした。支部は別々になったものの、1999年5月には、本州四国連絡橋尾道・今治ルート（瀬戸内しまなみ海道）が全線開通し、中国地方と四国地方は、時間的にさらに近くなった。一方、この10年間は、全国的に自然災害が多く発生したが、中国地方においても、二度の地震（鳥取県西部（2000年10月6日）、芸予地震（2001年3月24日））、台風による高潮被害（台風18号（1999年9月21～25日））、大規模土砂災害（1999年6月末梅雨前線豪雨（1999年6月29日））などの自然災害が発生した。

### 11.8.2 支部活動

支部の運営にあたり、支部通常総会（年1回）、商議員会（年2回）、幹事会（年6回程度）が行われ、事業推進のための各種事業の企画、実施についての検討を行っている。その他、「研究発表会」、「講演会」、「講習会」、「見学会」等を行っている。

#### (1) 研究発表会

支部研究発表会は、毎年5月末から6月初めにかけて行われている。四国支部の設立により、発表件数、参加者数の大幅な減少が心配されたが、若干は減少したものの、それ程大幅な減少は見られなかった。「支部研究発表会」は行事の中でも中心的なイベントであり、研究発表だけでなく、「特別講演」、「見学会」、「懇親会」等を開催している。また、研究発表では、若手優秀発表者の表彰を1991年度以降行っている。表1に年度ごとの支部研究発表会の発表件数を示す。

#### (2) 講演会・講習会・見学会等

会員へのサービス、土木技術の啓蒙、一般市民への広報など、その時々話題を取り入れ、年に数回の行事を行っている。例えば、講演会は、「阪神大震災速報講演会（1995年）」、「新しい水資源としての都市下水の再利用（1996年）」、「社会基盤整備とパブリックインボルブメント（1998年）」、「日本の近代土木を築いた人びと（2002年）」など、幅広いテーマで行われている。

また、講習会は、「コンクリート標準示方書」の改訂に伴うもの、あるいはその時々話題を取り入れたもの「公共事業における環境影響評価（1999年）」、「技術者と倫理（2000年）」など、幅広く行われている。

見学会は、技術者向けのもの、「土木の日」行事の一環として一般市民を対象としたものがあり、一般市民向けのものとしては、「広島高速4号線トンネル（2000年）」、「しまなみ海道（2001,2002年）」など、普段滅多に入ることのできないトンネル工事現場に入ったり、吊橋や斜張橋の塔頂に登ることができるなど、非常に好評を得ている。

#### (3) 会員・賛助会員へのサービス向上企画

中国支部では、会員へのサービス向上企画として、1996年度より「技術相談室」を設置している。この技術相談室は、I～VII部門の各部門ごとに、4～5名程度の相談員を選出し、それぞれの分野における技術的な質問等を相談できる制度である。技術相談の申込書は、中国支部のホームページからダウンロード可能であり、中国支部宛に、質問事項を郵送あるいはFAXで送ることにより相談の申込みを行う。

また、賛助会員向けのサービスとして、2003年度より以下のことを行っている。

- ・講習会無料参加券の配布  
賛助会1口につき5枚の無料参加券を配布。

- ・講習会使用のCD配布

前年度に開催された支部主催講演会において作成した講演会資料をCDに取りまとめ、賛助会1口につき1枚のCDを配布。

#### (4) 支部ホームページ

中国支部のホームページは、1997年に開設された。その後、何回か改訂が行われ、現在に至っている。

現在のURLは、<http://www.jscecb.com/> であり、「支部組織・活動」、「行事予定」、「支部賛助会」、「技術相談室」、「刊行物のご案内」、「中国地方の土木構造物」、「リンク」、「中国支部へのMail」などがある。図1に中国支部ホームページのトップページを示す。

#### (5) 中国支部島根会の設立

島根地域で、土木・建設系の学科があるのは、松江高専1校であり、島根地域で年3回程度の継続教育プログラムを企画実施するのは、松江高専にとって大変労力を要する。一方で、島根地域の会員が多数の講習会が行われる広島市周辺に出向くのは、時間的にも、経済的にも負担が大きい。

そこで、関東支部で行われている地域会を手本として、島根会が2004年2月に設立された。初代の島根会会長には、菅原信二島根県土木部長が選出され、16年度より活動を開始した。島根会では、多くの地域幹事が情報を交換し、知恵を出し合い、継続教育プログラム等の行事を企画実施し、土木関係者の技術向上および親睦交流の場を提供する。

#### (6) 事務局

中国支部の事務局は、中国四国支部時代の1970年から自治会館内（広島市中区基町10-3）に設置され、今日に至っている。支部長が所属する部局から支部長が事務局長および事務局員を委嘱し、職員がその指示に従って事務を進める方式で、松岡美和子（1970～1980）、川野喜美子（1980～2001）、安部幾野（1996～1997）石井真理（1998）、原田久美（1999～2000）、舛田晶子（2001～）が職員として勤務している。

表2に1994年度以降の支部長、副支部長、幹事長名を一覧表として示す。

#### (7) その他

- ・全国大会

1999年度の土木学会全国大会は、9月22日～24日の3日間、広島大学を主会場として開催された。大会3日目の24日は、台風18号が西中国地方に上陸したため、予定されていた1,486編の講演は中止となった。広島では、強風と高潮により、世界文化遺産である厳島神社の左門客（ひだりかどまろうど）神社（国宝）が倒壊したり、製造中の100トンクレーンが強風で倒れ、3人が死亡するなどの被害が続出した。

表-1 中国支部研究発表会の開催場所、発表件数

| 年度   | 開催場所       | 発表件数 |
|------|------------|------|
| 1994 | 鳥取大学       | 364  |
| 1995 | 福山大学       | 254  |
| 1996 | 徳山高専       | 309  |
| 1997 | 岡山大学       | 370  |
| 1998 | 広島大学       | 397  |
| 1999 | 鳥取大学       | 366  |
| 2000 | 広島工業大学     | 391  |
| 2001 | 山口県セミナーパーク | 456  |
| 2002 | 岡山大学       | 350  |
| 2003 | 福山大学       | 315  |
| 2004 | 鳥取大学       | 330  |

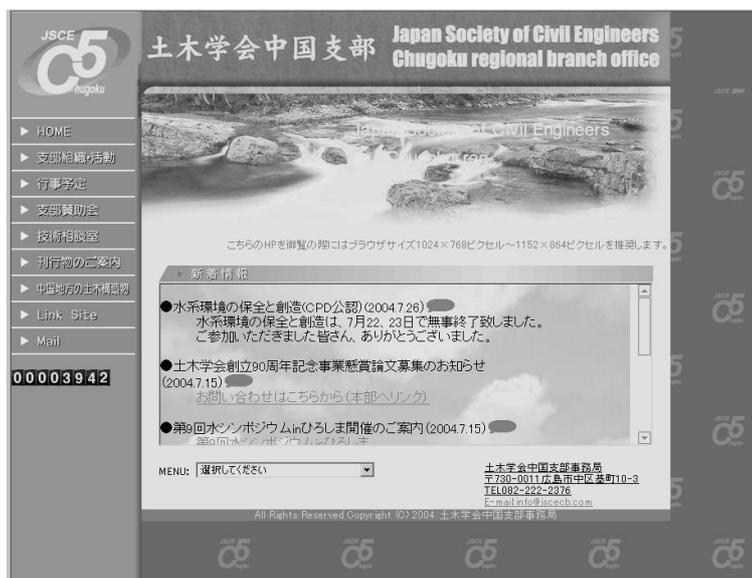


図1 中国支部ホームページ

表-2 中国支部歴代支部長，幹事長一覧（1994年～）

| 年度   | 支部長   | 副支部長 | 副支部長 | 幹事長   | 備考     |
|------|-------|------|------|-------|--------|
| 1994 | 定井喜明  |      |      | 宇都宮英彦 | 中国四国支部 |
| 1995 | 門田博知  | 日月俊昭 | 斎藤 隆 | 日下部 治 | 中国支部   |
| 1996 | 日月俊昭  | 西林新蔵 | 谷口健男 | 坂井重信  | 中国支部   |
| 1997 | 西林新蔵  | 高橋道生 | 福岡捷二 | 上田 茂  | 中国支部   |
| 1998 | 浅井武彦  | 井上啓一 | 木村 晃 | 菅原勝広  | 中国支部   |
| 1999 | 渡部義信  | 野田英明 | 皆田 理 | 土山和夫  | 中国支部   |
|      | 久保田壮一 |      |      |       | 中国支部   |
| 2000 | 野田英明  | 名合宏之 | 村田秀一 | 井上正一  | 中国支部   |
| 2001 | 名合宏之  | 福岡捷二 | 花村哲也 | 谷口健男  | 中国支部   |
| 2002 | 福岡捷二  | 吉野清文 | 富田武満 | 佐藤良一  | 中国支部   |
| 2003 | 吉野清文  | 村田秀一 | 上田 茂 | 国岡敏文  | 中国支部   |
| 2004 | 村田秀一  | 木山英郎 | 中野修治 | 古川浩平  | 中国支部   |

[村田 秀一・麻生 稔彦・中村 秀明]

## 11.9 四国支部

### まえがき

四国支部は1994年5月30日に開催された第80回通常総会で「中国四国支部の分離」が承認され、1995年3月31日付の文部省の認可を得て、同日付けで土木学会定款が変更され、1995年5月26日に「四国支部設立総会」を開いて誕生した最も新しい支部であり、今回初めて学会史に登場した次第である。

四国支部が設立されるまでの経緯については、中国四国支部時代のことであり、1994年11月土木学会発行の「創立80周年記念：土木学会の80年」の第6編1.9中国四国支部の節で、さらに第8編の中で河野清（当時の土木学会副会長、現徳島大学名誉教授）により記述されているので、本稿は設立総会から起稿する。

### 11.9.1 設立総会・設立記念講演会・設立祝賀会

#### (1) 設立総会

95年1月24日に中国四国支部四国部会の中に椎野佐昌部会長（建設コンサルタンツ協会）を委員長とする「設立総会実行委員会」を発足させ、95年5月26日に会員318名（四国の個人会員総数1361名）が出席して、香川県教育会館ミュージズホール（高松市西宝町）で四国支部設立総会を開催した。

中国四国支部支部長定井 喜明（徳島大学名誉教授）が仮議長となり、支部規程を審議、議決し、支部役員を選出した。支部長には建設省四国地方建設局長山田 直重が選出された。

続いて、新支部長の挨拶、来賓の土木学会中村 英夫会長、関西支部白石 成人支部長より、地域での活動の大切さを指摘した祝辞をいただき、引き続き新支部長が議長となり、95年度事業計画と予算が承認された。

#### (2) 設立記念講演会

続いて、同じ会場で会員と一般市民合わせて410名が参加して、設立記念講演会が行われた。

- 1) 「直下型大地震に学ぶ」 土木学会兵庫県南部地震第1次調査団団長 田村 重四郎
- 2) 「地域政策の視点」 香川大学経済学部長 井原 健雄

#### (3) 設立祝賀会

香川県教育会館ラポールイン高松で約230名が出席して設立祝賀会が行われた。

四国四県の知事を代表して平井城一香川県知事、経済界代表の山本博四国経済連合会会長、四国地区大学代表の岡市友利香川大学学長、関連学会代表の山本忠司日本建築学会四国支部長からご祝辞をいただき、盛大な祝賀会となった。職種・年齢をこえて、意見を交換し、土木や四国の将来を考える場としながら、懇親を深めた。

### 11.9.2 支部の規程・運営・事業

#### (1) 支部規程・規則等

先に述べたように、学会定款に四国支部が認められたのは、1995年3月31日であり、これに基づき、1995年5月の設立総会で、1) 四国支部規程、2) 委員会規則、3) 委託研究規則、4) 研究助成金制度規則、5) 技術研究発表会優秀発表者表彰規定が議決された。1) は支部の行う行事、組織、役員、会計等を決めた支部の基本法であり、1999年5月に本部の指導（全支部一斉）により、支部総会の権限・成立条件、職場班の設置等の一部改正を行った。2) は支部の行う研究、調査等のために設置する委員会に関する基本事項を規定している。3) は支部が担当すると予定される委託研究に関する基本事項を決めたものである。4) は四国支部に所属する会員が参加して企画、運営される土木工学および土木事業に関連する研究集会・共同研究への助成を行い、支部活動の活性化をはかることを目的とする制度に関する基本事項を規定したものである。5) は毎年支部で行う技術研究発表会の表彰について規定したものであり、2001年11月に表彰対象者等の一部改正を行った。

## (2) 支部の運営

支部の運営は学会定款・支部規程・支部規則に則って行なわれる。

支部総会は毎年 5 月（本部総会の前）に香川・高知・愛媛・徳島の順に各地区持ち回りで開催しており、同時に、会員ならびに一般市民向けの特別講演会を行っている。（表-1）

また、商議員会を年 2 回（11 月、5 月（総会直前））、幹事会を年 4～5 回開催して、支部の円滑な運営を図っている。

表-1 四国支部総会および特別講演会開催一覧（1996～2004）

| 日 時       | 場 所               | 演 題                            | 所 属                      | 講演者    |
|-----------|-------------------|--------------------------------|--------------------------|--------|
| 1996.5.17 | 三翠園ホテル<br>(高知市)   | 地域連携軸と地域づくり                    | 三菱総合研究所社会公共政策<br>研究センター  | 谷本 信   |
| 1997.5.23 | 松山市郵便貯<br>金会館     | 自然観と魚道                         | 愛媛大学 名誉教授                | 水野 信彦  |
| 1998.5.22 | 徳島市厚生年<br>金会館     | 明石海峡大橋の開通と 21 世<br>紀への期待       | 本州四国連絡橋公団第二管理<br>局長      | 辰巳 正明  |
| 1999.5.21 | 香川県県民ホ<br>ール      | 技術と経済の比較文明論－第<br>二敗戦論を克服するために－ | 香川大学 教授                  | 岩本 雅民  |
| 2000.5.12 | 三翠園ホテル<br>(高知市)   | 龍馬と路面電車とまちづくり                  | 高知県立坂本龍馬記念館 館<br>長       | 小椋 克己  |
| 2001.5.11 | メルパルク松<br>山       | 地域と I T 戦略－CAL S を<br>踏まえて     | 松山大学経営学部経営学科<br>教授       | 田崎 三郎  |
| 2002.5.17 | ホテルクレメ<br>ント徳島    | 水辺ぐらしの環境学－水辺は<br>だれのものか？       | 京都精華大学 教授・琵琶湖博<br>物館研究顧問 | 嘉田 由紀子 |
| 2003.5.16 | 全日空ホテル<br>クレメント高松 | 社会資本整備の意義と役割                   | 香川大学 名誉教授                | 井原 健雄  |
| 2004.5.14 | 三翠園ホテル<br>(高知市)   | ごっくん馬路村から始まった<br>地域づくり         | 馬路村農業協同組合代表理事<br>専務      | 東谷 望史  |

## (3) 事業

四国支部の行う事業は支部規程第 3 条に謳われているように、多種多様である。そのうち (1) 8 年毎に開催地となる全国大会、(2) 毎年 5 月に実施している技術研究発表会、(3) 調査研究に関することについては別に述べる。

会員や一般市民を対象に、学術的な、あるいは啓蒙的な講演会・講習会・見学会・パネル展等の学会活動は、支部行事と地区行事に整理される。支部行事は四国全域を対象とする行事で支部幹事長が中心となり、地区行事は各地区を対象として、各地区から出ている幹事が中心となって献身的に遂行されている。表 2 に 2003 年度に実施した行事の一覧表を示す。参加人数が数名の行事から 200 名を越す行事と幅があるが、各地区とも「CPD プログラム」に真剣に（2001 年度後半から）取り組んでいる。各県に一校ずつ土木系統の学科を有する大学があり、更に土木系の科のある高専が 3 校（香川、徳島、高知）あるのは心強い。なお、表中の⑤の学術講演会は毎年地盤工学会四国支部と共催で行われている。

表2 2003年度四国支部行事一覧表

| 行事名  | 期日     | 場所                | 参加者数 |
|--|--------|-------------------|------|
| <b>【支部行事】</b>  |        |                   |      |
| ①フライアッシュを細骨材補充混和材として用いた<br>コンクリートの施工指針(案)講習会〔CPDプログラム〕<br>共催：四国コンクリート研究会                                     | 6月19日  | 徳島県会場ウエルシティ徳島     | 154名 |
|  | 6月24日  | 高知県会場新阪急ホテル       | 87名  |
|  | 7月1日   | 愛媛県会場松山メルパルク      | 54名  |
|  | 7月8日   | 香川県会場ウエルシティ高松     | 776名 |
| ②土木の日記念講演会〔CPDプログラム〕   | 11月21日 | アイテムえひめ(松山市)      | 160名 |
| ③「四国のインフラの将来と課題」に関する講演会<br>共催：四国コンクリート研究会  | 12月2日  | 香川大学地域開発共同研究センター  | 40名  |
| ④四国の自然災害に関するフォーラム〔CPDプログラム〕<br>共催：重信川の自然をはぐくむ会<br>重信川フォーラム「重信川の自然再生と環境学習への活用」<br>自然災害フォーラム「豪雨と地震による災害から身を守る」 | 2月20日  | 愛媛大学工学部           | 92名  |
| ⑤学術講演会〔CPDプログラム〕<br>市民参加による南海地震に対する防災まちづくり<br>共催：地盤工学会四国支部   | 2月28日  | 高知共済会館            | 104名 |
| <b>【香川地区】</b>  |        |                   |      |
| ①技術講習会「建設技術と環境」〔CPDプログラム〕  |        |                   |      |
| 1)海域環境改善のための炭酸カルシウム化多孔質体の開発  | 1月26日  | 香川大学工学部           | 10名  |
| 2)木炭チップ、溶融スラグ、天然ゼオライト等各種機能<br>材料を混入したポーラスコンクリートブロックの開発   | 3月2日   | 香川大学工学部           | 11名  |
| 3)分析SEM(走査型電子顕微鏡)のコンクリート試料への応用   | 3月29日  | 香川大学工学部           | 7名   |
| ②市民向け講演会   |        |                   |      |
| 1)高橋 裕(東大名誉教授)講演会  | 6月2日   | 香川大学工学部           | 180名 |
| 2)海域環境調査－海の中を見てみよう－  | 8月22日  | 香川大学農学部浅海域環境工学実験室 | 31名  |
| 3)夏休み親子映画鑑賞会「伊能忠敬－子牛線の夢－」  | 8月27日  | ウエルシティ高松          | 237名 |
| 4)「香川の水開発の歴史」  | 10月6日  | 香川大学工学部           | 45名  |
| ③工事見学会「新宇治川放水路と高知新港の見学」  | 11月27日 |                   | 46名  |
| <b>【徳島地区】</b>  |        |                   |      |
| ①技術講習会(最新技術に関する講演とワークショップ)<br>〔CPDプログラム〕   |        |                   |      |
| 1)小型月面探査車開発における地盤工学・ジオメカトロニクスの貢献   | 9月12日  | 徳島大学工学部           | 14名  |
| 2)「土壌のマトリックスと水分特性および透水性について」   | 10月10日 | 徳島大学工学部           | 21名  |
| 3)「鋼・コンクリート複合構造物における接合部の力学」  | 11月7日  | 徳島大学工学部           | 25名  |
| ②市民向け講演会「第6回 身近な用水路の生物調査」  | 6月23日  | 徳島市国分町以西用水        | 110名 |
| ③技術交流会   |        |                   |      |
| 1)橋梁(上部・下部)の設計段階における建設コスト縮減の着目点  | 7月23日  | 徳島大学工業会館          | 100名 |
| 2)平成15年度地域防災研究会シンポジウム－洪水災害に備える   | 11月23日 | 阿南市文化会館視聴覚室       | 85名  |

### 11.9.3 全国大会

#### (1) 1995 年度全国大会

支部創設の年に四国で全国大会が行われることは、当時はまだ参加人数をも気にする風潮があり、新参の支部には大きな試練であったが、会員の努力と各組織の協力により過去最大の 7039 名の参加者を記録するなど無事遂行できた。

テーマは「自然・人・土木－災害に強い社会の構築をめざして－」で、1995 年 9 月 19 日（火）から 21 日（木）の 3 日間、「いで湯と城と文学のまち」松山市で開催した。

##### 1) 特別講演会 愛媛県県民文化会館

|                    |             |       |
|--------------------|-------------|-------|
| 実行委員長挨拶            | 建設省四国地方建設局長 | 山田 直重 |
| 日本における治水の歩みと展望     | 土木学会長       | 小坂 忠  |
| 鳥や鯨から見た地球規模での環境の変貌 | 愛媛大学前農学部長   | 立川 涼  |

##### 2) 阪神・淡路大震災復興対策シンポジウム 愛媛県県民文化会館

1. 阪神・淡路大震災－その教訓と復興への役割－ 兵庫県副知事 溜水 義久

##### 2. パネルディスカッション

「阪神・淡路大震災 土木技術への教訓と復興への役割」

コーディネーター 片山 恒雄（東京大学）

話題提供者 岡村 甫（東京大学） 河田 恵昭（京都大学） 高田 至郎（神戸大学） 溜水 義久（兵庫県副知事） 松井 保（大阪大学） 三木 千尋（東京工業大学）

##### 3) 研究討論会 愛媛大学城北地区

討論会総数 15 題

##### 4) 第 50 回年次学術講演会 愛媛大学城北地区

学術講演発表総数 6 部門・共通セッションで 3954 題

#### (2) 2003 年度全国大会

四国支部は他支部のように Big One の都市がなく、よい意味で四国は四つであり、8 支部一巡した四国での 2 度目の全国大会は、「四国三郎」こと吉野川と阿波踊り」で知られる徳島市で 2003 年 9 月 24 日（水）から 9 月 26 日（金）の 3 日間開催した。

テーマは「安全・安心な生活、個性ある地域社会の実現を目指して」で、近い将来起こると予想される南海地震の対策を進めている四国には格好のテーマであった。

##### 1) 特別講演会 徳島市立文化センター

|      |           |                      |
|------|-----------|----------------------|
| 開会の辞 | 全国大会実行委員長 | 南部 隆秋（国土交通省四国地方整備局長） |
| 基調講演 | 土木学会長     | 御巫 清泰（(社)日本港湾協会会長）   |

##### 2) 特別討論会 徳島市立文化センター

地震防災と社会基盤整備

－安全・安心な社会基盤の構築に向け土木学会は何ができるか、何をなすべきか－

コーディネーター 山上 拓男（徳島大学工学部教授） 村上 仁士（徳島大学大学院工学研究科教授） 澤田 勉（徳島大学工学部教授）

パネリスト 伊藤 和明（NPO 法人防災情報機構会長） 入倉 孝次郎（京都大学防災研究所教授） 河田 恵昭（京都大学防災研究所教授） 五軒家 憲次（徳島県海南町長） 重川 希志依（富士常葉大学環境防災学部教授） 土岐 憲三（立命館大学理工学部教授） 古田 光弘（(社)徳島新聞論説委員会論説委員） 安田 進（東京電機大学理工学部教授）

3) 研究討論会 徳島大学 常三島キャンパス

討論会総数 20 題

4) 第 58 回年次学術講演会 徳島大学 常三島キャンパス

学術講演発表総数 7 部門・共通セッション・特別セッションで 3971 題

#### 11.9.4 技術研究発表会

支部主催の技術研究発表会を毎年 5 月に総会と同様に、各県持ち回りで開催している(表 3)。発表会では、会員の一般論文発表のほか、会員の情報交換、技術研鑽に資することを目的として、部門を超えた話題性のあるテーマについて、討議を行うためフォーラムを行っている。

#### 11.9.5 委員会活動

四国支部委員会規則に基づいて設けられた委員会を設置された順に記載する。

| 委員会名               | 設置期間 (年度)     | 委員長                           |
|--------------------|---------------|-------------------------------|
| 1) うるおい四国検討委員会     | 1995 年～1998 年 | 定井 喜明 (徳島大学名教授)               |
| 2) あんぜん四国検討委員会     | 1995 年～2002 年 | 八木 則男 (愛媛大学)<br>矢田部 龍一 (愛媛大学) |
| 3) 社会資本問題研究委員会     | 1997 年～2001 年 | 河野 清 (徳島大学)                   |
| 4) 国際問題研究委員会       | 1998 年～       | 大久保 禎二 (愛媛大学)<br>鈴木 幸一 (愛媛大学) |
| 5) HP 編集委員会        | 1998 年～       | 山中 英生 (徳島大学)                  |
| 6) 支部選奨土木遺産選考委員会   | 2002 年～       | 廣瀬 義伸 (徳島大学)                  |
| 7) 四国地域緊急災害調査委員会   | 2004 年～       | 長谷川 修一 (香川大学)                 |
| 8) 四国ブロック南海地震研究委員会 | 2004 年～       | 村上 仁士 (徳島大学)                  |

(委託研究のために設けられた委員会については、委託研究の項で記述する)

1) と 2) は、中国四国支部四国部会当時から活動を始めており、1) の「うるおい四国委員会」は 95 年 8 月には「四国に豊かさ潤いをもたらした土木事業」を出版し、同年 9 月四国で行われた全国大会の会場で販売された。2) の「あんぜん四国検討委員会」は、大地震、洪水、地すべり等自然災害の多い四国にとって、up-to-date な委員会、このことは、土木学会誌 Vol.86 May 2001 に、「支部のページ」で矢田部 龍一 (愛媛大学教授) が言及されているので参照されたい。いずれにしても、この二つの委員会と、97 年、98 年に設置された 3)、社会資本問題研究会と 4) 国際問題研究委員会とが、四国支部の調査研究の原動力となり、その成果は各種の出版物となっている。(資料：支部不定期刊行物参照) また、委託研究の調査委員会の母体ともなってきた。なお、海外調査団は、1999 年と 2001 年と 2 回欧州に派遣しており、また 99 年の台湾地震の際も調査団を派遣している。

#### 11.9.6 優秀卒業・修了生の表彰

土木系学校からの推薦に基づき、その年度の優秀卒業・修了生に支部長名の表彰状と記念品を授与している。当初の 1995 年度は、大学 2 名 (徳島大学・愛媛大学)、短大 1 名 (徳島大学工業短期大学部)、工業高等専門学校 3 名 (阿南・高松・高知)、県立工業高等学校 11 名 (徳島・貞光・阿南・多度津・安芸・高知・高知定時制・宿毛・八幡浜・松山・東予) の 17 名であった。1996 年 3 月徳島大学工業短期大学部の閉部、1997 年 4 月高知工科大学の開学、同年 10 月香川大学に工学部設置、1999 年 4 月工業高等専門学校 3 校に専攻科の設置等の変遷 (学校名・学科名・科名の変更は省略) があり、また 2001 年度からは、大学院修士課程も対

象とするとしたこともあり、2003年度には25名（大学4名、大学院4名、高専3名、高専専攻科3名、高校11名）の表彰を行った。

#### 11.9.7 研究活動助成金

学術、技術の水準を向上させ、支部の活性化をはかるために、四国支部に所属する会員が参加して企画、運営される土木工学及び土木事業に関連する研究集会、共同研究等への経費の助成を行っている。助成金には、研究集会に対する「助成金（A）」と共同研究に対する「助成金（B）」とがあり、成果は支部長に年度ごとに提出される。2003年度の助成を例示すると、助成金（A）は岡部健士（徳島大学工学部）が代表者の「応用生態工学に関する日韓共同セミナー」の1件、助成金（B）は（1）香川地域土木界と環境・防災・リサイクル・ITに関する研究（高松高専22名）（2）南海地震を想定した構造物耐震診断手法の開発（株）サン土木コンサルタント26名）（3）地域特性を反映した地震防災に関する研究（愛媛大学工学部36名）（4）地域情報システムを活用した地域情報の収集及び発信に関する研究（香川大学工学部6名）の4件である。助成金（B）については例年3、4件あり、地震防災に関するものが多い。

#### 11.9.8 委託研究

現在様々の課題に直面している社会資本整備に関するもので、特に地域の問題となっているものへの取り組みに、委託研究は非常に有効である。

四国四県に散らばっている、研究者・行政担当者の専門家を横断的に集結でき、地域に密着した学会活動と評価できる。

四国支部が行ってきた研究を表4に示す。契約は単年度であるが、2、3年継続されているものが多い。

表4 委託研究一覧(1995～2003)

|             |                                    |                  |                         |
|-------------|------------------------------------|------------------|-------------------------|
| 1995年～1997年 | 四国地方の地震災害に関する調査研究                  | 建設省四国地方建設局       | 八木 則男(愛媛大学)             |
| 1998年～2000年 | 四国地方の社会資本整備効果の算定手法についての研究          | 建設省四国地方建設局       | 荒木 英昭(高知工科大学)           |
| 1996年       | 満濃池築造の歴史に関する調査研究                   | 建設省まんのう公園工事事務所   | 水口 裕之(徳島大学)             |
| 2001年～2002年 | 平成14年度四国地方の土木遺産八十八ヶ所調査研究           | 国土交通省四国地方整備局     | 吉野 文雄(香川大学)             |
| 2003年       | 平成15年度地域づくりを考慮した社会資本整備評価システム研究業務委託 | 国土交通省四国地方整備局     | 土井 健司(香川大学)             |
| 2003年       | 平成15年度アセットマネジメントシステム調査研究業務委託       | 国土交通省四国地方整備局     | 那須 清吾(高知工科大学)           |
| 1997年～2000年 | 四国の高速道路の整備効果に関する研究                 | 日本道路公団四国支社       | 八木 則男(愛媛大学)→柏谷 増男(愛媛大学) |
| 2001年～2003年 | 四国の高速道路利用者の将来推定に関する研究              | 日本道路公団四国支社       | 柏谷 増男(愛媛大学)             |
| 1999年       | 高速道路が四国の社会経済に与える影響調査               | 日本道路公団四国支社       | 井原 健雄(香川大学経済学部)         |
| 1998年～2003年 | ダム水環境改善工事河川環境調査合併(調査委託)研究          | 徳島県              | 岡部 健士(徳島大学)             |
| 1995年～1996年 | 21世紀初頭に向けた四国地方の土木施設のあり方に関する調査研究    | (社)四国建設弘済会       | 水口裕之(徳島大学)              |
| 1997年～1999年 | 四国における社会資本整備の進め方に関する調査研究           | (社)四国建設弘済会       | 河野 清(徳島大学)              |
| 2000年～2001年 | 四国地方の市民参加型公共事業の進め方に関する調査研究         | (社)四国建設弘済会       | 鈴木 幸一(愛媛大学)→白木 渡(香川大学)  |
| 2000年～2002年 | 四国の自然災害に関する調査研究                    | (社)四国建設弘済会       | 矢田部 龍一(愛媛大学)            |
| 2002年～2003年 | 土木技術者のための合意形成技術の教育方法に関する研究         | (社)四国建設弘済会       | 山中 英生(徳島大学)             |
| 2003年       | 四国の地盤情報に関する調査研究業務委託                | (社)四国建設弘済会       | 矢田部 龍一(愛媛大学)            |
| 2001年～2002年 | 四国における石炭灰のコンクリートへの適用性に関する調査研究      | (財)四国産業・技術振興センター | 河野 清(放送大学徳島学習センター)      |

### 11.9.9 「土木の日」及び「くらしと土木の週間」

四国支部では、関係機関の協力のもと「土木の日」及び「くらしと土木の週間」の関連行事を活発に実施し、会員ならびに土木関係者のみならず多数の市民の参加を得て、土木技術が社会基盤の整備に果たす役割について理解を深めていただくとともに、土木に対するイメージアップに努めた。

これまでに、実施した「土木の日」の記念講演を表5に掲げる。また、「くらしと土木の週間」行事では、地元の小・中・高生ならびに一般市民を対象とした高速道路・ダム・発電所・港湾などの土木施設や土木工事現場の見学会を実施するとともに、パネル展や学園祭での土木技術の展示等を通じて土木事業に対する興味と理解を深めていただき、地元の方々から期待される地域の行事として確実に定着してきている。

表5 土木の日記念講演会開催一覧(1995～2003)

| 日時         | 場所        | 演題                            | 氏名     | 所属               |
|------------|-----------|-------------------------------|--------|------------------|
| 1995.11.27 | 高松商工会議所会館 | 福祉の街づくり                       | 村田 哲康  | 四国学院大学社会学部教授     |
|            |           | ヨーロッパにおける危機管理と災害管理活動          | 小田 利勝  | 徳島大学総合科学部教授      |
| 1996.11.19 | ミューズホール   | 男と女、分かち合いのパートナーシップ            | 池田 弘子  | (株)人間科学研究所代表取締役  |
|            |           | 高松クレーターの地下水を探る                | 長谷川 修一 | (株)四国総合研究所副主席研究員 |
| 1997.11.18 | オークラホテル   | 地域開発と公共事業                     | 林 道    | 宿毛市長             |
|            |           | (座長) パネルディスカッション「四国の活断層と地震防災」 | 八木 則男  | 愛媛大学             |

|            |          |                     |        |                           |
|------------|----------|---------------------|--------|---------------------------|
|            |          | (パネラー)              | 矢田部 龍一 | 愛媛大学                      |
|            |          | ( 〃 )               | 澤田 勉   | 徳島大学                      |
|            |          | ( 〃 )               | 村上 仁士  | 徳島大学                      |
|            |          | ( 〃 )               | 長谷川 修一 | (株)四国総合研究所                |
|            |          | ( 〃 )               | 山中 義之  | 四国地方建設局                   |
| 1998.11.18 | 香川県県民ホール | 土木と自然の共生をめざして       | 池谷 奉文  | (財)日本生態系協会 会長             |
|            |          | 瀬戸大橋と地域の10年         | 平井 城一  | 前香川県知事                    |
| 1999.11.18 | 香川県県民ホール | 21世紀に活躍するシビルエンジニア像  | 岡村 甫   | 土木学会会長 (高知工科大学副学長)        |
|            |          | 生き物と共生する街づくり        | 鎌田 磨人  | 徳島大学工学部建設工学科助教授           |
| 2000.11.14 | サンピア高知   | いごっそうからの提言          | 吉村 文次  | 高知NPO理事長                  |
|            |          | 近未来の社会と土木技術者の役割     | 岡村 甫   | 高知工科大学副学長                 |
| 2001.12.7  | アスティとくしま | 楽園 吉野川              | 三好 和義  | 写真家 (徳島市出身)               |
|            |          | 四国の地震・津波の特徴と地域防災    | 村上 仁士  | 徳島大学大学院工学研究科教授            |
| 2002.11.22 | サンメッセ香川  | 城を活かしたみちづくり・まちづくり   | 新谷 洋二  | 東京大学名誉教授 (財)日本開発構造研究所 理事長 |
|            |          | 世界インフラ紀行            | 大内 雅博  | 高知工科大学助教授                 |
| 2003.11.21 | アイテムえひめ  | ユニ・チャームの成長発展とインフラ整備 | 高井 正勝  | ユニ・チャームプロダクツ(株) 最高執行責任者   |
|            |          | 工人 宮本武之輔に学ぶ         | 鈴木 幸一  | 愛媛大学工学部環境建設工学科教授          |

#### 11.9.10 役員・会員数・事務局

歴代の支部長・幹事長を表6に示す。

表6 四国支部歴代支部長・幹事長 (1995～2004)

| 年度   | 支部長氏名  | 所属                    | 幹事長氏名 | 所属                   |
|------|--------|-----------------------|-------|----------------------|
| 1995 | 山田 直重  | 建設省四国地方建設局長           | 芦田 義則 | 建設省四国地方建設局企画調査官      |
| 1996 | 中島 弘   | 四国電力(株)取締役            | 佐藤 武夫 | 四国電力(株)建設部次長         |
| 1997 | 大久保 禎二 | 愛媛大学工学部環境建設工学科教授      | 柏谷 増男 | 愛媛大学工学部環境建設工学科教授     |
| 1998 | 江頭 素樹  | 日本道路公団四国支社長           | 高橋 文雄 | 日本道路公団四国支社建設部長       |
| 1999 | 平尾 潔   | 徳島大学工学部建設工学科教授        | 澤田 勉  | 徳島大学工学部建設工学科教授       |
| 2000 | 福田 昌史  | 建設省四国地方建設局長           | 深見 親雄 | 建設省四国地方建設局企画部長       |
| 2001 | 梅原 利之  | 四国旅客鉄道(株)代表取締役社長      | 別枝 修  | 四国電力(株)建設部次長         |
| 2002 | 荒木 英昭  | 高知工科大学工学部社会システム工学科教授  | 島 弘   | 高知工科大学工学部社会システム工学科教授 |
| 2003 | 南部 隆秋  | 国土交通省四国地方整備局長         | 片平 和夫 | 国土交通省四国地方整備局企画部長     |
| 2004 | 白木 渡   | 香川大学工学部信頼性情報システム工学科教授 | 松島 学  | 香川大学工学部安全システム建設工学科教授 |

\*所属の名称は当時の名称で記す

1999年に土木学会本部が立てた3年間に会員を5割増の5万人にする増強計画に合わせて四国支部も5割増の2千人に個人会員を増強する運動方針を立て、職場班等を通じて運動した。かなりの成果はあったものの目標数にはまだ達しておらず、今後とも努力の望まれるところである。四国支部の会員数の推移を表7に示す。

表7 四国支部会員数（1994～2004）

|           | 個人会員  | (名誉会<br>員) | (フェロ<br>ー会員) | 学生会<br>員 | 法人会員+<br>特別会員 | 合計    |
|-----------|-------|------------|--------------|----------|---------------|-------|
| 1994年12月末 | 1,307 | 2          | -            | 179      | 106           | 1,592 |
| 1995年12月末 | 1,361 | 3          | -            | 144      | 102           | 1,607 |
| 1996年12月末 | 1,391 | 2          | -            | 181      | 101           | 1,673 |
| 1997年12月末 | 1,379 | 2          | -            | 320      | 103           | 1,802 |
| 1998年12月末 | 1,353 | 2          | -            | 227      | 99            | 1,679 |
| 1999年6月末  | 1,300 | 2          | -            | 123      | 95            | 1,518 |
| 1999年12月末 | 1,395 | 2          | 39           | 284      | 98            | 1,777 |
| 2000年3月末  | 1,352 | 4          | 41           | 342      | 104           | 1,798 |
| 2001年3月末  | 1,465 | 3          | 41           | 308      | 107           | 1,880 |
| 2002年3月末  | 1,484 | 3          | 41           | 375      | 105           | 1,964 |
| 2003年3月末  | 1,355 | 3          | 43           | 294      | 100           | 1,749 |
| 2004年3月末  | 1,259 | 4          | 44           | 283      | 94            | 1,636 |

注：名誉会員及びフェロー会員は個人数に含まれる。

四国支部の活動の実務を司る事務局長は、幹事長が選出されている機関に所属する職員が務めるのが通例である。ただ、幹事長は支部長と共に毎年交代していくので、支部の連続性の上から、また、支部長の所属する大学・公共機関・公益的企業のなかで、金銭の出納を取り扱うのも問題があるため、固定した事務所が必要となる。四国支部設立時の事務所を預かるには、土木学会のことを知っている必要があることから、中国四国支部で四国部会長であった会員椎野佐昌が2000年3月まで非常勤で事務所に勤めた。2000年以降は林道恵（1994年6月～）・笠井 斗美恵（2002年4月～）の2人が勤務している。

事務所は1993年9月、まだ四国部会であった時から現在まで、高松市福岡町4丁目にある（社）四国建設弘済会所有の建設クリエイティブビル4Fの1部屋を、建設コンサルタンツ協会四国支部と2分して（17.7㎡）を使用している。しかしながらこの部屋の使用は、弘済会との間の賃貸契約ではなく弘済会の余裕のある部屋の使用を、管理に要する費用を負担することにより公益的見地から弘済会が了承しているだけで、弘済会が必用する時は、空けざるをえない条件である。また、支部設立から10年、書類、報告書、出版物、文献、書籍等が年々増えて置き場所がなくなっており対応を考えなければならない時期にきている。

[椎野 佐昌]

## 11.10 西部支部

### (1) 西部支部の変遷

支部活動の活性化を図るために1974年6月に事務所を借り入れて事務局を独立した。  
支部事務局の変遷は次のとおりで、会議室の確保のために1997年9月に現在の事務所に移転した。

|         |                                   |
|---------|-----------------------------------|
| 1989年3月 | タイセイビル2F（博多区博多駅前2-4-12）へ移転        |
| 1997年9月 | シーティーアイ福岡ビル（中央区大名2-4-12）へ移転、現在に至る |

### (2) 全国大会の変遷

1994年以降の全国大会の西部支部内での開催は、2001年度に実施されており、その概要は以下のとおりである。支部所在地（福岡市）でない熊本市で初めて開催された。

2001年度全国大会：10月2日～4日

#### ・第56回年次学術講演会

開催場所：熊本大学工学部

講演数：3,743編

参加者：6,095名

#### ・見学会：石橋見学ツアー（10月4日～5日）

### (3) 「土木の日」の変遷

西部支部では、福岡・北九州・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄の各地で「土木の日実行委員会」が組織され、各種イベント等の広報活動が行われている。2003年度の広報活動は次のとおりである。

#### 1) 広報活動の趣旨

- ・日頃土木になじみが薄い一般市民や子供達を対象に、九州の社会資本整備の将来像や土木の重要性について、考えたりふれあったりしてもらう機会として実施。
- ・2003年度は地域の観光資源にもなりうる土木遺産にスポットをあて、九州各地に多数存在する土木遺産の美しさや重要性をPRすると共に、各地で実施される「土木の日」の催しについて新聞による広報を実施した。記事および新聞社の取材は次のとおりである。

#### 2) 記事内容

毎日新聞への記事掲載

第1回(9月27日掲載)：河内貯水池（福岡県北九州市）

第2回(10月4日掲載)：広滝第一発電所（佐賀県三瀬村）

第3回（10月11日掲載）：土木の日行事案内

第4回(10月15日掲載)：本河内高部堰堤(長崎市)

第5回(10月23日掲載)：三角西港（熊本県三角町）

第6回(11月8日掲載)：白水堰堤(大分県竹田市)

第7回(11月15日掲載)：塚原ダム（宮崎県諸塚村）

第8回(11月18日掲載)：鹿児島港旧石積防波堤（鹿児島市）

#### 3) 新聞社の取材による新聞記事

##### ①9月23日（火）掲載記事

毎日新聞：2003年度土木学会選奨土木遺産3件受賞の記事

##### ②11月26日（水）掲載記事

読売新聞：選奨土木遺産 佐賀県東与賀地区大搦堤防・授産社搦堤防記事

#### (4) 技術発表会及び講習会

技術発表会は新材料・新技術を主題に開催しており、2003年度のプログラムは下記に示すとおりである。

- ・PCウェルリフレ工法
- ・コンクリート構造物の品質保証システムに関する技術提案
- ・分級による関門航路浚渫土のリサイクル推進
- ・水力発電所を有する流域全体の土砂災害危険箇所のリスク管理・評価手法について
- ・維持管理時代のモニタリング新技術の紹介
- ・光ファイバ式ひずみセンサを用いた大型構造物の変状監視
- ・新形式形鋼橋梁（パネルHBB）の開発

また、講習会は本部主催、他学協会の共催・後援で実施しているが、西部支部主催の講習会を2002年度から実施しており、各年度の講習会の主題は次のとおりである。

2002年度 「社会基盤構造物の維持・管理と技術開発」

2003年度 「九州の将来像と今後の社会資本整備について」

その時の特別講演は技術推進機構からの講師により土木技術者の倫理の講演が実施された。

#### (5) 研究発表会

研究発表会の開催は、西部支部を5ブロックに分けて持回りで実施している。

1994年度からの開催校と論文数は表に示すとおりであり、論文数は幾分漸増傾向にある。また、研究発表会の特別講演も下記に示すように技術の動向や地域性等を考慮して開催し、好評を博している。

#### (6) 国際交流

国際交流に関して西部支部では1990年度より海外研修を実施していたが、以前の視察中心の形式から2003年度より交流に重点をおいた形式に変更した。2003年度は韓国を訪問し、延世大学で日本の大学事情・工事契約方法について・大型工事の現況・道路等設計基準について意見交換の場を設けた。また、清溪川復興事業、高速道路及び高速鉄道の視察をし、有意義な交流となった。

研究発表会の開催校と論文数

| 年 度    | 開催校    | 論文数 |
|--------|--------|-----|
| 1994年度 | 琉球大    | 397 |
| 1995年度 | 長崎大    | 481 |
| 1996年度 | 福岡大    | 506 |
| 1997年度 | 九州東海大  | 548 |
| 1998年度 | 九州工業大  | 501 |
| 1999年度 | 第一工業大  | 566 |
| 2000年度 | 九州産業大  | 574 |
| 2001年度 | 佐賀大    | 573 |
| 2002年度 | 西日本工業大 | 611 |
| 2003年度 | 日本文理大  | 614 |

### 研究発表会特別講演の演題と講師

| 年度      | 演 題   | 講 師  |
|---------|---|--|
| 1994 年度 | 燃える石の研究<br>－天然白リンの発見－   | 琉球大学理学部教授<br>加藤 祐三氏  |
| 1995 年度 | 日本の文化・長崎の心  | 長崎市文化国際課 嘱託<br>ブライアン・パークガフニ氏                                   |
| 1996 年度 | 南半球から見た逆さまな日本   | 麻生福岡短期大学助教授<br>クリス・フリン氏  |
| 1997 年度 | More Taste than Money<br>(大切なのは、お金よりセンス)  | SSH 英語研究会教師<br>熊本市国際交流振興事業団シティ FM<br>FMK パーソナリティー<br>グリーシィ・真実氏 |
| 1998 年度 | 特別セッション<br>・これからの構造工学教育について<br>・洞海湾の環境と生きものたち<br>・廃棄物の地盤について<br>・新北九州空港の計画について<br>・建設廃棄物の現状とその有効利用<br>・変革期の建設産業への課題 |  |
| 1999 年度 | 上野原遺跡と南の豊かな縄文文化   | 鹿児島県埋蔵文化財センター 課長補佐<br>新東 晃一氏                                   |
| 2000 年度 | トンネル覆工剥落事故原因と<br>今後の対策  | 京都大学大学院工学研究科資源工学専攻助教授<br>前 (財) 鉄道総合研究所トンネル研究室長<br>朝倉 俊氏        |
| 2001 年度 | 幕末佐賀の科学技術   | 九州国際大学国際商学部教授<br>佐賀大学名誉教授<br>長野 暹氏                             |
| 2002 年度 | 青年乃木希典日記<br>－箕島探勝記抜粋－   | 行橋市史編纂室長<br>白石 壽氏  |
| 2003 年度 | 沈み込み帯の温泉<br>－陸域と海域の物質循環系  | 京都大学大学院理学研究科<br>附属地球熱学研究施設教授<br>由佐 悠紀氏                         |

#### (7) 見学会

見学会は例年、年 3 回程度実施されており、うち 2 回は会員向け、1 回は市民向けに実施しており、2003 年度の実績は下記のとおりである。

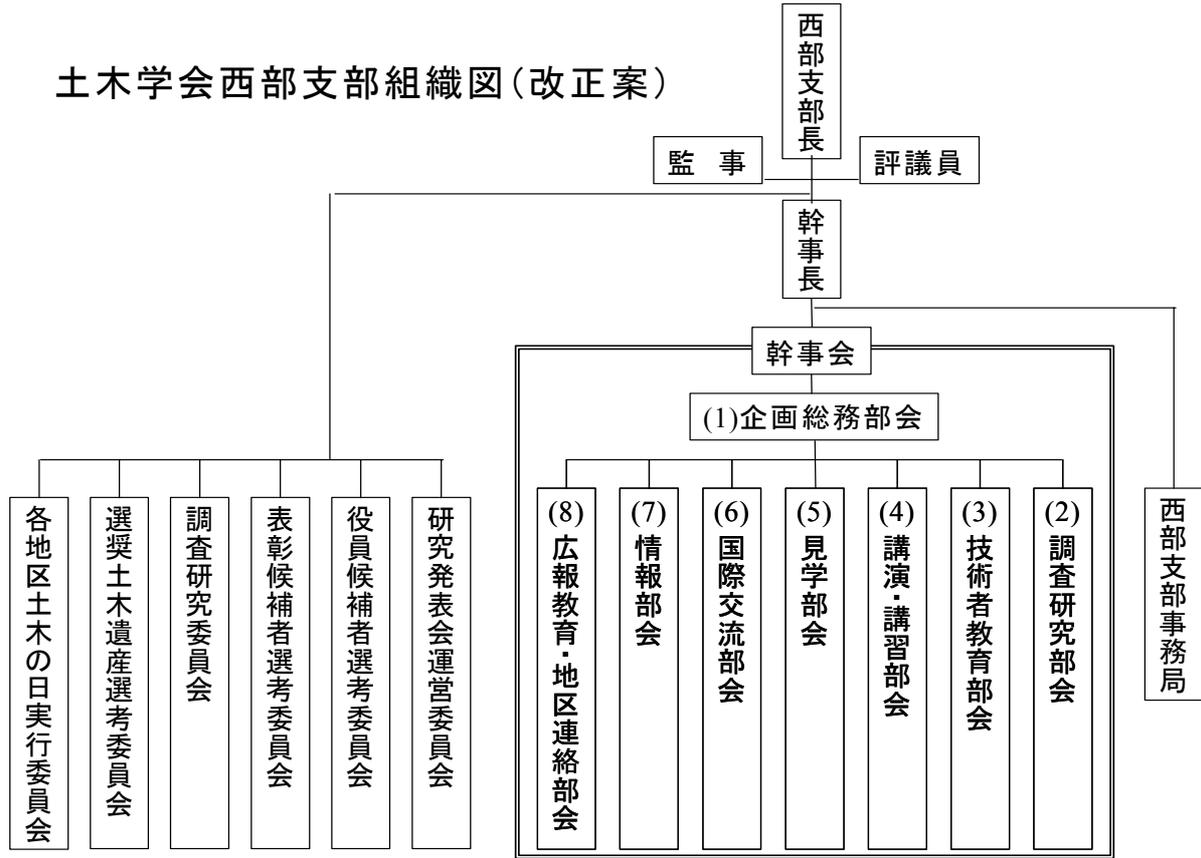
- 1 回目：小丸川発電所建設工事
- 2 回目：関門橋・関門トンネル現場見学会
- 3 回目：八丁原地熱発電所見学会（市民向け）

#### (8) 支部運営体制

近年、さまざまな意味で土木界を取り巻く環境が変化しており、それに対応して学会活動の在り方の見直しも必要に迫られている。特に、従来は、どちらかと言えば学会中心の活動傾向の強かった土木学会であるが、今や産・官・学を問わず、共通の緊急かつ重要な課題に直面しており、互いに連携し学会活動に取り組む必要性を感じている。

以上の背景から、社会的ニーズに対応しながら土木学会西部支部の活動をさらに活性化し、支部会員へのサービスのより一層の充実を図ることを目的として、1996 年度に一部改編されて以来、2003 年度より現在の組織運営体制と活動内容を再検討し幹事会・部会体制を改正した。実施内容としては、会員相互のコミュニケーションが図れるように、的確な情報提供をめざし支部ホームページの充実できるよう情報部会を中心に実施した。また、学会認定技術者資格試験を 2003 年度は西部支部内 6 大学で技術者教育部会を中心に実施された（下図参照）。

## 土木学会西部支部組織図(改正案)



### 2) 支部長機関

西部支部長の選出機関は産・官・学の8機関の輪番制で実施している。

1994年度以降の支部長は下記のとおりである。

#### 西部支部歴代支部長および幹事長一覧

| 年度     | 支部長            | 幹事長            |
|--------|----------------|----------------|
| 1994年度 | 入江 功           | 鹿籠 雅純・岩崎 三日子   |
| 1995年度 | 細田 信義          | 河野 直己          |
| 1996年度 | 武富 一三          | 溝辺 哲           |
| 1997年度 | 辻 勝成<br>熊谷 恒一郎 | 深見 一男          |
| 1998年度 | 井上 聡史<br>布施谷 寛 | 片桐 正彦<br>久保 省吾 |
| 1999年度 | 藤井 利治          | 平野 定           |
| 2000年度 | 西田 行宏          | 藤下 幸三          |
| 2000年度 | 江頭 和彦          | 熊谷 清           |
| 2000年度 | 楠田 哲也          | 日野 伸一          |
| 2000年度 | 速水 昭正          | 田中 郁夫          |